

僕のヒーロー（オリキャラをそれなりにぶちこむ）アカデミア

チョコレート・フォンドゥータ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリキャラがヒーローを目指すぞ！

教師やヴィランにもオリキャラがいるぞ！

しかも複数！

漠然と進学した主人公がさまざまな出来事でそれを真剣に目指すようになるお話

目次

第01話	1
第02話	15
第03話 戦闘訓練組み合わせ&第一戦	35
第04話 第2戦&第3戦	52
第05話 第4戦&第5戦	67
第06話 第6戦&放課後	84

第01話

「合格おめでとう！ 雄英高校ヒーロー科が君のヒーローアカデミアだ！」

3月某日夜、全国で40人のプロヒーローを目指す少年少女がその言葉を聞いた。

国立雄英高校ヒーロー科とは！

そこはプロに必須のあらゆる資格取得を目的とする養成校！

全国に存在する同科中で最も人気で、最も難しく、その倍率は例年300を超えるという！ちなみに今年の偏差値は75のまさに最難関である。

その卒業者たちの中には――

「平和の象徴」「ナチュラル・ボーン・ヒーロー！」国民栄誉賞を固辞したナンバー1ヒーロー”オールマイト”！

「燃焼系！」「事件解決数史上最多」精力的な活動を次々となすナンバー2ヒーロー”エンデヴァー”！

「ベストジーニスト8年連続受賞！」堅実さがヒーロー活動と人気で安定性を見せるナンバー4ヒーロー”ベストジーニスト”！

「若手実力派の成長株！」「ヴィラン戦、災害救助、警察捜査協力と多方面に華やかな活動で人気急上昇中！ナンバー5ヒーロー”PKエンプレス”！

等々のプロヒーローたちがトップ5に名を成しており、偉大なヒーローには雄英卒業が絶対条件とまで言われるほどなのだ!!!

さしあたっては光鎧路春臣こうがいじはるおみの話を始めよう。

○

朝、目を覚ました春臣は伸びをすると寝間着にしている聡明中のジャージのまままで階下へ行く。

1階の台所では母・真緒が食卓に朝食を並べているところだった。妹の硝子しょうこは居間のソファでくつろぎテレビでニュース番組を流しながら新聞を読んでいる。

「おはよう春臣。ちょうど支度ができたところだから早く顔を洗ってい

らっしやい。硝子もテレビ消して食べちゃいなさい」

「はーい。おはよう兄さん、遅いわよ」

「おはよう母さん、硝子。遅くないよ。で、母さんはなんでそんなにご機嫌なのさ……」

ぼやきながら春臣は洗面所へ向かい、洗顔と歯磨きをすませ、顔色の確認をする。

「んーんーんー？」

目が充血してるということはない、普段どおりの冴えるような董色の目だ。しかしそれも当然だ。特に寝付きが悪いとか夜中に頻繁に目を覚ましたりだとか、眠りが浅かったなどということもなかったのだから。

春臣がなぜ日頃やらない顔色の確認をしたか？

それは今日が日本のヒーロー志望中学生たちの憧れの学び舎、国立雄英高校の入学式の日だからである。

母の機嫌が良かったのもおそらくはそれが原因だろうと春臣は思っていた。

というかあの、もう高校生にならんとする息子がいるにしてはやたら若々しく、少女のような澆刺さを失わない母が朝から上機嫌な日は、だいたい父・夏輝が自分たち兄妹の節目の日だったりするのである。「冷めちゃうから早く来なさい」そんな物思いにふけていたら母の柔らかな声で注意された。

「父さんはまだ仕事？」

納豆に辛子とネギをぶち込みながらかき混ぜつつ、食卓にある小型のテレビから流れる朝のニュースに耳を傾けながら春臣は母へ問う。「なんでも捜査中のヴィランを逮捕出来そうな目処がたったからもうしばらく帰ってこれないって言ってたわね」

「もう一週間くらい帰ってきてないもんね、結構慎重に進めてるみたいだよ」

「現役ヒーローは大変だ」

母と妹の声を耳に入れつつふつくらとした白米をかつこむ。

「あら、あなたも将来は夏輝さんみたいに活動しないといけないのよ

？ それともやつぱりオールマイイトみたいなのヒーローに憧れる？
もしそうなら夏輝さんは複雑な顔で喜ぶでしょうね」

「父さんもオールマイイトも同じくらい凄いと思うし尊敬もしてるよ。
でも憧れっていうとなんかちよつと違うんだよね」

「はつきりしないね兄さん。そんなことで立派なヒーローになれると
思っているの？」

「いまいちぴんと来ないんだからしようがないだろ！ ボクがなりた
いヒーロー像もボクが決めるよ。それ立派かどうかは知らないな」

「あらあら。今日からヒーローの卵になるにしては可愛げのないこと
言うのね。ふふっ」

母のその息子を面白がるようなたしなめ方に、少しぼつが悪くなつ
た春臣は顔色を隠すように味噌汁に口をつける。真緒はそれ以上か
らかうようなことはせずやや真面目な声色で口を開いた。

「春臣、あなたがこれから雄英で3年を過ごしてどんなヒーローを志
すか、それは私や夏輝さんにはわからないわ。でもね、たった三年間、
けれど長い三年間でできるだけ広い視野を持てるようになりなさい。
あそこは色々な意味で型破りだからきつとあなたの世界を広げてく
れるわ」

「……………」

「そう、私が夏輝さんと出会ったのも雄英の体育祭だった……。そん
な素晴らしい出会いもあったりするわ。まあ春臣にはそんな出会い
は必要ないかしらね？ 智満ともみちゃんがいるものね」

「そういうのやめて」

やや顔を赤らめる春臣。

「兄さんにそんな甲斐性あるかなあ？ こないだ泊まりに来たときも
智満ちゃんとくに進展ないとか言ってたよ？」

「やめろやー！」

「夏輝さんも私も応援してるわよ？ でも避妊はきちんとしなさい
ね。あなたたちどちらもヒーロー科なんだから」

「本当によして!!?」

これ以上のんびり朝ごはんを味わっていると何を言われるかわか

らない。春臣はもうこれ以上無いという勢いで朝食を口に放り入れる。

「こら、早食いは健康に悪いわ。もったときちんと噛んで落ち着いて食べなさい」

誰のせいだと思いつつもそれを咀嚼しきれていない朝食とともに飲み下し席を立ち洗面所へ向かう。

「ごめんなさい、ごちそうさまー」

○

春臣は雑事を済ませたあと、自室で登校の用意をする。

今彼が身にまもっているのは国立雄英の制服。春臣が数ヶ月前まで通っていた私立聡明中学もブレザーだったのであまり新鮮味を感じられない。だがそれとは別の高揚感が身中から温かく沸き上がっている。

「中学が詰め襟だったらもうちよつと興奮したのかな？ まあいいか」

姿見でネクタイの位置を直しながらひとりごち、身だしなみの確認。

少し癖のある茜色の髪、冴えるような董色の瞳、やや浅黒い肌、身長は180センチに迫り、体型はこの個性社会ではいたって普通、なんの特徴もない二腕二足のヒト型。そんな自分の高校生バージョンの出で立ちを確認する。

「春臣ー。智満ともみちゃんが迎えに来たわよ。早く準備していらっしやい」

母の声に、春休み中に用意した各種教科書や体操着等々を詰め込んだザックを持ち、ハンカチとティッシュや携帯端末など必要雑貨の忘れ物の無いことを確認して階下へ降りた。

「おはようございますハルくん。今日から楽しみですね」

鮮やかな黒髪を肩口まで伸ばし、後頭部に朱色のリボンを留めている色白の少女が三和土から春臣を迎えた。彼女の周囲を雀程度の大さきの金色のカラスが飛び回っており、カラスとは思えない綺麗な声音でぴいと鳴いて挨拶する。

「おはよう智満。鳥も元気だな」

「いい加減名前で呼んであげてくださいよ、ヤタが可哀想ですよ？」

「なんか恥ずかしいからまた今度な。母さん！ 弁当できた？」

出待ちしていたのか台所から聞き耳を立てていたのか、春臣が言うが早いかな真緒が顔を出す。

「はいお弁当。うん、夏輝さんに似て良い男ぶりだわ。しゃんとしなさいね？ 高校デビューなんだから」

高校デビューは少し意味合いが違うのでは？ というか死語じゃなかったかなそれ？

そう思うも声には出さず白地に鮮やかな赤が染め抜かれたナプキンで包まれた弁当箱、まだ少し暖かい、を受け取り傾かないようにザックへ入れる。

「ありがとうございます、行ってきます」

「いってらっしゃい、智満ちゃんも気をつけてね。愚息のことよろしくね」

「任せて下さい真緒さん、ハルくんの扱いは慣れたものですから。では行って参ります」

「ひでえ言い草」

「そうですか？」

智満がその色違いの目。赤い右目と青い左目で春臣の目を見つめ小首を傾げる。

「べっつにー。もう慣れた」

前日は緊張もなかった春臣だが、やはり日本のヒーロー校へ入学するというところに思うところがあったのか、春休みに奮発して新調した革靴を履き玄関を開く。

新品の靴底が堅い音を立てる。春臣はなんだかその音に思わず笑みをこぼしてしまった。

○

春臣宅から徒歩5分のバス停からバスで揺られてさらに5分、最寄り駅から三駅、そしてそこから徒歩10分を行ったところに超広大な敷地を誇る国立雄英高校がでんと構えられている。

もはやそれはランドマークタワーじゃないか？　と思うこと請け合いの、HEROの頭文字Hを模した本校舎ビルが見える。

全面特殊ガラスで覆われており午前の日差しが反射し煌めいている。今日入学する子供たちの前途ある未来を祝福してくれているかのようだ。

周囲を見ればヒト型、異形型、それは本当にヒト型と分類しているのか？　と思うような体型や、とにかく様々に多種多様、千差万別、十人十色な若者たちが清潔な制服に身を包んで歩いている。

彼らの顔に浮かぶものに共通しているのは、自分が日本全国から選りすぐりの、超難関試験を抜けたヒーロー候補生であるという自負であろうか？　その若々しい頬を薔薇色に染めて本校舎ビルを夢見る瞳で見つめている生徒もいた。きつと春臣たちと同じ新入生なのだろう。

やたら堅牢な作りの校門をくぐり抜け「1」と大きく書かれた昇降口へと向かう。

下駄箱で用意した内履きに履き替え、まず校内見取り図を頼りに予め指し示られた教室へと向かう。春臣と智満が所属するのは1年A組だ。

ヒーロー科一般入試は毎年倍率が300を超過する恐るべき狭き門だがその理由は至極単純である。

定員40名。

つまりひとクラス20名で、2クラスしか存在しないのである。なお推薦合格枠が8名であり、ひとクラス総員24名からなるエリート候補生の名を欲しいままにする、それが雄英高校ヒーロー科合格者たちなのだ。

ごく自然な動きで廊下を珍しげに見回す智満ともみを連れ立って春臣は黙々と教室を目指す。

廊下は広く高い。通り過ぎる教室の扉もやたらでかい上にスライド式の引き戸で、取っ手の部分も金具が取り付けてあるというより、扉の天地を沿うように補強された溝が掘られている。どんな体型の学生・教師でも不自由のないように考えられたつくりだ。

春臣が腕時計で時間を気にしながら歩いていると

「あ、ありましたーAってでかでかど書かれていますね」

智満が指すほうを見るとたしかに覗き窓のついた扉にペイントされている。

「うん、これなら遅刻はしないで済むな。今日と同じくらいの時間に家を出れば余裕だわ」

「……そんなこといちいち計ってたんですか？ 真面目というかこまめというか律儀というか」

「うるさいなあ。遅刻するのは馬鹿らしいだろ？ 焦って朝から全力疾走なんてボクは絶対にごめんだね」

「それは確かに同感ですけどね……」

さて第一印象が決め手……。

春臣は扉に嵌めこまれているガラス製の覗き窓から内部を盗み見ると、すでに幾人かの生徒がまばらに席に付いていることがわかる。無人でないことを確認したらやることは決まった。

「おはようー」

扉をがらりと開けると明るくよく通る声で宣言した。

「おはようございます」

同じように教室に入る智満。そんな二人に教室内にいるうちの何人かは挨拶を返してくれた。

「おはようふたりとも！ また同じクラスになれるとは思わなかった。また一年間よろしく頼むー」

キレの良い声がズバッ！ ビシッ！ というような擬音がまるで聞こえてくるかのような動きとともに教室に響いた。

背筋のぴんと伸びた生真面目そうな四角い眼鏡の少年、飯田天哉だ。

「これで3年目の腐れ縁ってことになりますね飯田くん」

「腐れ縁って……。もう少し良い表現をしてくれると友人として嬉しいよ齋女くん」

「そいつ丁寧語なくせにたまーに毒を吐くのが芸風だから言うだけ無駄だぜ飯田。そいつと16年目の腐れ縁なボクが保証する」

「まあ！ 酷い言い草ですね」

「無視して続けるけど、飯田はやっぱ一番乗りだったのか？」

また始まった。そんな顔をしながらも飯田は春臣へ返答する。

「ああ。今日は目覚めもすつきり鮮やかだったから、これからの新しき第一歩を踏みしめるためにも、絶対に遅刻などしてはいけないからね。思わぬ事故で遅延が起こっても困るので普段より早く家を出た」などと旧友とじゃれあっていたが、飯田の「黒板に座席表が貼られている」という発言で一端この会話も打ち切りとなった。

「―――教卓―――」

轟	口田	麗日	青山
葉隠	砂藤	尾白	赤熊
爆豪	障子	紙木城	芦戸
緑谷	耳郎	上鳴	蛙吹
峰田	瀬呂	切島	飯田
八百万	常闇	光鋲路	斎女

「飯田の近くじゃん！ っていうかほぼ真後ろじゃないか！ わざわざ行つて来いとか、飯田がそのまま教えてくれてもよかっただろ？」
席に座りながら慥然とした顔で春臣がぶつくさ言う横で苦笑いする智満。

「いや、やはり進学して新しい場所を自分の目で確認するというのは何者にも代えがたい喜びだと思うんだ。新天地に共に赴いた友人とはいえ、みだりに君の席はここだったぞと言うのは憚られる」
「そういうところが本当に飯田くんですよね……。悪いとは言わないですけど、いわゆる学級委員長気質」

そんなやりとりをしてる間にも続々と教室に入ってくる新たなクラスメイトたち。

そのたびに飯田はわざわざその生徒に向かって行き、四角四面な自己紹介を始め、お互いこれから切磋琢磨しがんばって立派なヒーローになるろう！ などと言っている。

「無理して僕を俺って言い直さなくて良いと思うんだけどな」

「同じ僕使いとして仲間が減るのは寂しいんですか？」

「はあ!? 一人称でジャンル分けとかあんの? なにその僕使いって」

「なんでも男の子はそういう年頃になると、やたら一人称にこだわったりすると姉さんが言ってたので。ハルくんもそういうこだわりで他人より深い仲間意識を飯田くんに持っていたのかな、と。さっきの発言もその意識が成せる技だったんでしょう?」

なんとも曰く言い難い苦り切ったような表情を智満に向ける春臣。智満は、これが苦虫を噛み潰したような顔というものでしょうか、などとお気楽に感じていたが

「喜魅佳^{きみか}さんも何言ってんだかたまに本気でわからなくなるな……」

「姉さんはつねに今を最高に楽しめればそれでよしと考えてる節がありますからね。享楽主義者というものです」

享楽主義とか快樂主義とはまたひと味違う気がするけどね、と一年上の幼馴染の普段の言動を思い浮かべながら黙りこむ春臣。

二人がそんな他愛もない会話を繰り返している間に座席の半分ほどが埋まっていた。

「チッス! 俺は切島ってんだ。これからよろしく頼むぜ」

春臣の真ん前の座席にいい音を立ててカバンを置きながら快活な挨拶をする、髪の毛をギザギザにおっ立てたつり目気味な少年。右まぶたに小さな古傷がある。

「ウィース。ボクは光鎧^{こうがいじ}路、隣のは幼馴染の斎女^{いづきめ}だよ、こちらこそよろしく」

「よろしくお願いしますね切島くん」

春臣の幼馴染発言にいかな感想を持ったのか切島は小気味良く口笛を短く吹き鳴らす。

例によって飯田がやってきて自己紹介を始めるが、そろそろ登校門限が近づいているから続々と生徒が入ってきており、自席に戻る暇がなくなってきたている。

「すげー律儀だなアイツ。いいね、ぴしつとしてて男らしいぜ」

とは切島の言。

そんな中で凄いチンピラオーラをまき散らして教室に入ってきた少年がいた。

入るやいなやその鋭い目つきでぎろりと生徒たちを睨みつけるように見渡す。なにを思ったのか挑発するかのように鼻で荒く息を吐き出す。「はんっ」とそんな音が聞こえた。

そのまま指定の座席へ座ると乱暴に荷物を机にかけ、さらには右足を机上に放り出して椅子を後ろへ傾け体重を預ける。まさにクラシカルなチンピラスタイル。

これに黙っていられないのが学級委員長気質とまで言われた飯田である。

堅い音が聞こえそうな身振りで説教を開始した。そのまま殺し甲斐とか本当にヒーロー志望かい!? などと言い争いが始まってしまったが、教室の入り口にまた一人ぼさぼさ癖っ毛の少年が現れると、飯田のスイッチが切り替わるように自己紹介モードになり近づいていった。

そのまましかめっ面で会話が続きところを見ると知り合いだろうか? さらに一人ふわふわしてそうな女子がぼさ髪の少年に話しかけなにやら和気藹々とし始める。

「なんだか良い雰囲気じゃないですかあの二人」

「そうか? ぼさい方はなんかやたらに赤面しててそういう発展性とか気にしてる余裕なさそうだなぞ」

「もう! ハルクくんはそんなだから面白みが無いんですよ」

そんな罵られるようなもんだろうかと春臣が思っていると予鈴が鳴った。

入り口から芋虫のようなものが直立しのそのそと侵入してくる。

「静かになるまで8秒かかりました。まったく合理性を欠くねえ新入生」

口ぶりからすると教師らしい。自己紹介によるとA組の担任教師で名を相澤消太というそうだな。

最後に教室に入ってきた二人の男女はそそくさと割り当てられた

席につくと、先ほど直接教師に叱られたせいが必要以上に恐縮し、姿勢まで正して相澤教師の発言を聞いている。

相澤は寝袋から雄英の体操着を引っ張りだし、

「早速だが諸君には体操着に着替えてグラウンドへ集合してもらおう。更衣室経由の移動時間も踏まえて制限時間は15分つてとこか。ここにいるからにはすべてがヒーローになるための必要時間だ。1秒たりとも無駄にしないように。時間は有限だ」

「先生！ 質問があります！ 入学式は出席しなくてもよろしいのでしょうか!？」

「ウチは自由主義でね。教師がどうカリキュラムを作るかも自由なんだ。わかったか？ なら急げ。時間は限りがあるんだぜ。二度言わせるな」

「は、はい！ 失礼しました！」

飯田のびしつとした質問に相澤もまた小汚いだらけた外見とは裏腹にびしつと返答し、そのまま教室を出てしまう。一足先にグラウンドへ向かったのだろう。

「まったくなんという校風だ。驚きだ。だがすべてがヒーローになるための時間か……まさしくその通りだ！」

感動しているのか興奮気味にひとりごとを漏らしながらきてきと体操着を引っ張り出す飯田。生徒たちは各人すでに配布された簡易見取り図を頼りに更衣室へ向かった。

○

雄英を文字って記号化したUAという文字をさらにデザイン化した体操着に着替え、グラウンドに皆が揃ったのは相澤が教室を出てからおよそ10分後。ストップウォッチで時間を計っていた相澤はそれを止め、気だるそうな動きで皆を整列させる。

「ハイじゃあお前らにはこれから個性把握テストをしてもらおう。似たようなのは中学の体力測定でやったと思うが、あれと違うのは個性の使用を許可するって点だけだ」

文科省の怠慢だのなにやら国に不満を持っているような発言が見え隠れしたが、やることは変哲もない体力測定に個性を使うことで、

自分がそれでどのようなことを出来るか把握するという主旨である。相澤はソフトボールを投げ渡しながら言う。

「爆豪、お前、中学のソフトボール投げの記録は？」
「チンピラボーイ爆豪が指名された。」

彼はヒーロー科入試に設けられた、情報力・機動力・判断力を大前提とした上での2つの審査基準。

敵を打ち倒す力と、他人を助ける心。

その前者で他の受験者たちより優れた結果を出していたことか原因だろう。

じゅうぶんな敵を打ち倒す力をデモンストレーションに使い、生徒たちへとわかりやすくこのテストの主旨を目に見えるものにする狙いだ。!!!
「死ね!!!」

物騒な掛け声と共に炸裂音がすると爆風がボールを加速させ飛ばす。大きく弧を描いていくそれはゆるやかに落下すると相澤が測定値を爆豪へと伝えた。その数値705.2メートル。

「この測定で自分の個性の最大値を認識すること。それが個性を活用するヒーローの素地を形成する合理的手段の一步目だ」

なるほど。春臣は爆豪の実演と相澤の発言からまさに個性把握テストということを認識する。

ただ、あらゆる個性があり得る生徒に、それこそ八種目、ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50メートル走、持久走、握力測定、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈だけでは合理的とはいえないんじゃないかと思うが、それも先ほどの相澤のどんなカリキュラムにするかも教師の自由というのが利いているのだろう。それとも自分が受け持つ生徒の個性をまとめた結果、それらだけで十分と踏んだのかもしれない、そう思った。

「さすが英雄ヒーロー科だぜ！ 個性を使い放題って超面白そう！」
クラスメイトがこぞって沸いている中で春臣はさらに考える。

爆豪の個性は爆発を発生させるものようだ。

ヒーローという職業は犯罪者であるヴィランとの戦闘がほぼ不可

避である。

災害救助を主に行っているヒーローといえど愉快的ヴィランや二次災害を引き起こして損害拡大を目論むヴィランとの戦闘が起こることもある。

そんな職種で殺傷力に直結する彼の個性は非常に適しているといえる。さらには災害救助でも場合によってはお役立ちだろう。

面白い。ヒーロー科ではさまざまな授業や試験で個性使用が関わるのなら、クラスメイトの個性の使い方などから学ぶことも多いだろう。実に面白い。

我知らずほくそ笑んでいる春臣をごく自然に隣に並んでいた智満ともみが若干引き気味な表情で見ていた。

「面白いって？　今面白いと言ったか？　これからヒーローになるために費やす3年間を面白いと？」

相澤が静かな怒気を含ませながら宣言する。曰く、この個性把握テストで総合成績最下位はヒーローの見込み無しと判断し除籍する、と。

楽しさに沸き立っていた生徒たちは瞬間的に沈静化し、また再燃した。

「入学初日にそれは理不尽だ」「冗談ですよね!」「せっかく実技試験で頑張ったのにそんなのつてありかよー!」

相澤はそんな生徒たちに聞こえるようにため息をつく。落胆のため息だ。

「理不尽？　あらゆる自然災害や突発的な人災、さらには自分の欲望を満たすために市民を脅かす身勝手なヴィランたち……。日本は、いや日本のみならず世界は多彩な理不尽にあふれているよ」

相澤の発言と身にまとう雰囲気^{きふく}に気圧されたかぐつと押し黙る生徒たち。

「だがそんな理不尽にこそ毅然と立ち向かいハネ退けるのが君らが目指すところのヒーローというやつだ。ここはどこだ？　英雄高校ヒーロー科だ。放課後マックで談笑なんていう中学までの甘えた学校生活からはさつさと卒業しろ。」

これから3年間俺たち教師は君たち生徒に危難を与え続ける。ク
ク……言ったらろう？ 生徒をどう扱うかも教師の自由だつてな。
……ようこそ雄英高校ヒーロー科へ……。” P l u s U l t r a
” (さらに向こうへ) さ。
全力で乗り越えて来い」

第02話

春臣は恥じていた。

直前までクラスメイトの個性を分析したつもりでいい気になっていたことを。面白いと思ったことを。相澤の言葉で打たれていた。

「ボクはただの格好つけ野郎だ……」

「いきなり温度差が激しくて困惑するんですけどどうしたんですか？

相澤先生の発言が何か刺さったんですか？」

「いやまあ……ね。これも乗り越えるものって感じだよ」

「自己完結されても困るんですけど。あ、五十音順だからそろそろ行きますね」

○

第一種目50メートル走

グラウンドには50メートルラインが白線で引かれ、スタート地点にはすでにスタートブロックが用意されている。いつの間に用意されたのかと思うが、あちらこちらにかしやかしやと忙しくメカがうごめいていた。

メカはそのままゴール地点に固定され、なにやらカメラを調節するように感觉器を細かく動かしていた。それがタイムを計測するのだろう。

「用意はできたから出席番号順で二人ずつ出てこい。ほかの連中は横で並んで待機している」

相澤の言葉に赤熊が前へ出る。細長い印象を与える体格をした金髪碧眼の少年だ。特筆すべきは目だろう。白目が存在せず、まるで眼窩に淡い宝石がはめ込まれたような瞳がそこに存在していた。

彼は同じく金髪碧眼の青山と並びスタートラインへ立つ。春臣たち他の生徒は指示通りに出席番号順、つまり50音順で2列に並び始める。

ブロックに足をかけクラウチングスタートの体勢に入る赤熊。見れば下半身が滑らかに変型していき、しなやかな四足獣の後足のような獣脚になっていく。

対して青山は「個性を使つていいということさ」などと言ひ放ち後ろを向く。訝しげな顔をする待機列の生徒たち。

相澤の合図とともに二人は疾走する。いや青山は走らなかつた。腹部から輝くビームを発射し、それを推進力としたのだ。走ると言うよりも飛んでいる。だが出力が足りないのか持続力が乏しいのか、50メートルを飛び越えることはできず、一拍着地すると再度照射しゴールラインを割つた。その記録5秒51。

一方、赤熊は柔軟性を感じさせるストライドで安定した走りを見せた。こちらは青山よりは地につけていたが、やはり走ると言うよりはむしろ跳ねると言つたほうが適した動きでゴールし、記録は4秒04。

ただ走るだけの計測だがビームで地面と並行に飛び、肉体を変型させて飛び跳ねるように疾走した第一陣は、相澤の目論見があるのか無いのか他の生徒たちにどういふテストかを改めて再認識させた。

そして第三陣。

飯田と智満ともみが走りだす。飯田は教科書に載つてゐるような綺麗なフォームで、足にあるエンジンを吹かして駆け抜けた。地面を震わせる重低音を彼のふくらはぎから突き出ているマフラーが響かせる。記録3秒04。

智満は肩に乗せていた金の小カラスが合図と共に全長3メートル、翼長7メートルになんなんとする大鳥に変化し、それが彼女を運ぶ。こちらにも走っていないが大鳥の力強い羽ばたきと滑空で記録3秒86。

「飯田くんはやっぱり早いですね」

「いや齋女くんこそ驚いた。その鳥にそんなことができるなんて初めて知つたよ」

「ヤタつて呼んでいます。飯田くんもそう呼んであげてくださいね」
「ああ。よろしく頼むよヤタクん」

すでにヤタはいつもの大きさと形状に戻っている。飯田に見つめられてることに気付くと可愛らしいくりくりとした目をやぶにらみにしてガンをつける。

「……いや本当に驚きだよ」

第五陣。

赤い角縁の大きな眼鏡を掛けた紙木城かみきしろは足元に無数の紙を散らし展開すると、それを無限軌道……キヤタピラ状に起動させ滑るように疾走した。肩口で切り揃えられた淡い桃色の髪が風に撫でられると、その追い風を利用するためか背中から帆のように紙を広げるとさらに速度をあげる。記録4秒77。

前髪に黒のメッシュが入った金髪の上鳴は個性が走ることに適していないのか使用せず、記録6秒88。

続いて第六陣。

春臣の番が来た。隣には切島がいる。

一度深呼吸すると春臣は個性を発動させる。

不可視の超力場が音もなく発生し、彼の全身を包むように広がるとそれは四腕四足のヒト型を取る。

頭高3メートルほどの巨人。

超力場は無色透明だが光の僅かな屈折でその輪郭がうつすらとわかる。

頭部には湾曲した角を思わせる部位を左右対称に一对備え、がっしりとした筋骨隆々な体躯に下半身は獣脚。見るものが見れば悪魔を連想するようなシルエツトだった。

それは春臣の体を地面から離し浮かび上がらせるが、中心部の春臣に浮遊感は全くと言っていいほどに無い。地面をしっかりと踏みしめているような感覚がきちんと足には残っていて安定も感じている。

「位置について、ヨーイ」

相澤の声が聞こえる。

START!

瞬間。

獣脚の超力場がスターティングブロックを軋ませた。

ざくざくと刻むような足音で疾走し記録3秒37。

それに少し遅れて切島の記録5秒69。

「くっそー、速いなー！ 負けちゃったぜ！ 光鎧路の個性って増強

系？」

「まあそんな感じ。あれ出しているとブーストされるから筋力測定みたいなのは良い結果を出せそうだよ」

「かーっ！俺なんてこう…硬くなるだけだからなあ！体力測定とかじゃあんま意味ねえや」

とくに問題も起こらずテストは進み、握力測定、立ち幅跳び、反復横跳びが次々と消化されていく。

赤熊と紙木城は3種目すべてで、春臣は握力測定と立ち幅跳びで、智満は立ち幅跳びでそれぞれ好成績を記録する。

次の種目は最初に爆豪がデモンストレーションをやらされたソフトボール投げだ。

赤熊は単純に腕力を増加させ、智満はヤタに啜えさせたボールを砲弾のように発射し、紙木城は紙でボールを固定して橋をかけるように延々と伸ばし、これまでの計測で各々が得た個性のコツで、次々と滞り無く記録を計測していく。

そして春臣が円に入り、浅く呼吸すると個性発動。

超力場は春臣の動きを正確に再現し、ボールを手のひらで支えている。それをそのまま投げる。ボールは真上へとまっすぐ飛び、そのまま春臣のもとへと落ちていく。

タイミングを合わせて跳躍し、春臣はボールを渾身の力を込めて平手で打った。バレーボールのジャンプサーブの要領だ。弾き出したそれはあつという間に飛んで行く。測定結果は809・15メートル。

「もう200上乗せは、まあ無理か」

そうこぼすと円から退出し次の生徒へと譲る。

待機列に戻ると爆豪が睨みつけてきたが、春臣にはそれが何に起因するものかわからないし、理由もなくチンピラ気質と積極的に関わりあうつもりもないのでさり気なく視線を外して無視した。

なにやら突き刺す視線の力が強まった気がするが気にしない。

春臣には知るよしもないが、この時春臣は爆豪のブッコロシリストに名が載ったのである。他にも教室で彼に説教していた飯田あたり

も記載されていた。

生徒たちは次々と計測を済ませていったが、それまで淡々と指示し開始の合図と計測結果を示す以外に、とくに何もしていなかった相澤が大きな動きを見せた。

顔のほとんどを隠してしまうほど長く、手入れもされていない伸ばしっぱなしのべたついた髪は、今や水中にうねる海藻のごとくゆらぎ逆立ち全貌を露わにしている。それまで半眼気味だった相澤の両目は鋭く見開かれその瞳はいかな作用かちらついている。

「つくづく……つくづくあの入試は合理性に欠ける。俺が何度言っても変わりやしない。そのせいでお前みたいな生徒が篩ふるをくぐり抜けてきてしまう」

教室で注意を受けていたもさもさ髪の男子、緑谷がどうやら説教さされているようだ。

相澤の気迫が納まり髪も垂れ下がると、沈んだ様子の緑谷は2度目の計測のために位置につく。

説教が利いたのかそれまでも十分悪かった顔色が今や完全に青ざめていた。さらにうわ言のようになにやらつぶやいているのか口元が小刻みに動いている。

春臣が近くの飯田に話しかける。

「なんか深刻そうな顔になってるけど何言われたんだろ？」

「なにやら指導を受けていたようだが……？」

「ハッ、除籍宣告だろうよ！」

飯田の発言に爆豪が吐き捨てるように言う。

「どちらにせよ何か注目してるのかな？　これまでずっと淡々と指示して記録つけてたんだし」

「あのクソナードに注目するところなんざネエーよ!!!」

「君はさつきも彼が無個性だと言っていたが知らないのか？　彼は入試でとんでもない動きをしていたんだぞ」

「ハア？　だからテメエこそさつきっから何言ってたんだよお!」

飯田が入試で緑谷と一緒にだったということは伝わったが、そこで彼が何を見たのかを聞く前に動きがあった。

待機列での会話など聞こえているわけもない緑谷は決意を固めた表情で再び振りかぶる。

それをどこか冷めた眼差しでみつめる相澤。

だがしかし緑谷はソフトボールを先ほどとは違い、掛け声と共に大きく投げ飛ばし705・3メートルの記録を打ち出した。

これに喜んだのが麗日だ。彼女は教室に入ったばかりのときも彼と会話を弾ませていたから心配していたのだろう。

「やった！ やつとヒーローっぽい記録が出たよ！ やったね緑谷くん！」

若干酷い物言いに聞こえるが素直に喜びを全身で表現している。

「指があんなに腫れ上がっているぞ。入試のときといいおかしな個性だ」

「スマートじゃないよね」

「いやあ？ おかしいとかスマートじゃないって問題超えてないかなアレ。ブーストすると壊れるって今までよく五体満足でいられたな。おっかない個性だ」

飯田と青山の少しずれてる発言に反応する春臣。

しかしそれよりも過剰な反応を示した爆豪。ただでさえ釣り上がっている目をあらん限りに釣り上げ目を剥き、口もこれ以上無いほど大きく開かれている。唾然という言葉を表現しろと言われたら、今彼以上に表現力を持つ者はいなかったらう。

「オオイ!! コラ!!! デクどういうことだ!!!!!! 説明しろポケナスがあ!!!!!!」

「よほどたまりかねたのか怒声とともに個性を使つて飛びかかる。」

が、しかしその瞬間右手のひらから発生していた爆発現象は霞のごとく消失し、見る間に襷たすきのような、だがそれよりもはるかに長さのある布に絡め取られ拘束されてしまった。

爆豪は思わずカエルが潰されたようなうめき声を挙げて身を振よじるが、よほど強固に締め付けられているのかぎりぎりと思えることしかできない。

それを駆使しているのは相澤だった。首元に何重にも巻きつけて

いた布がそれだ。さらに先ほどのように髪を逆立たせて爆豪を睨みつけている。

「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ特製の対ヴィラン用鎮圧捕縛布だ。……まったく何度も俺の個性を使わせるんじゃないよ。ドライアイが辛いんだからな!？」

個性を使うと髪が浮かび上がるのはどういうギミックなんだろう、とほぼすべての生徒が思ったであろうが、相澤の髪が重力に従い垂れ下がると爆豪への拘束も緩めて布を巻き取る。爆豪の興奮も治まったと判断したのだろう。

爆豪はただただ憤りを思わせる表情で歯噛みし、緑谷を睨みつけることしか出来なかった。

「時間の浪費だ。まだ次が控えてるんだからふたりとも戻れ」

緑谷が赤黒く変色し大きく腫れ上がった指を右手ごと支えて待機列へ戻ると麗日が心配そうに迎えて声をかけていた。それに少し遅れて爆豪がうつむきがちに戻り、ソフトボール投げは引き続き進行していく。

「あの布は凄いな。的確に巻きつけた相澤先生の技術もさすがプロっと感じだし、いつ投げ飛ばしたのかわからなかった。たしかに自分の個性を活かすために必要な装備は考えどころかもしれない」

「ハルくんの個性だとそういう特殊な装備って不要ではありませんか?」

「そうだけどああいう捕縛器具とかの補助は必須だよなって感じた。そうだよなあ、ヴィランをぶちのめしても丁度良くそこに警察がいるとは限らないもんな」

「そうですね。私だったらこの子に任せればだいたいのはひと通りなんとかしてくれると思いますけど。ね? ヤタ」

智満の言葉に胸を張って頼りがいのありそうな声でひと鳴きする鳥。春臣は雄英初日からなかなか刺激的な体験をしてこの先への期待が否応にでも膨らむのだ。

○ 測定は上体起こし、長座体前屈を済ませ、今は持久走の時間だ。

赤熊は50メートル走と同じく下半身を増強・筋肥大させ呼吸もペースも一切乱すことなく安定の走りを見せた。体を動かすということには抜群の結果を出している。

春臣は個性による超力場の巨人を駆使し疾走。長距離でエンジンが暖まり快速で走る飯田とデッドヒートを繰り広げて惜しくも飯田の次にゴール。

智満ともみは50メートル走のときと違いさらに巨大化したヤタの背に乗り飛行してごく短時間でゴールし、クラスメイトのほぼ総数から走ってねえ! というツツコミを入れられたが、これを素知らぬ顔でスルー。

紙木城は自分より大きなセイルのようなものを紙で作りあげ風を利用し滑走、50メートル走でのやり方を改善したような走り方であった。飛ばすと、これまたお前走れよとツツコミが入るが冷徹な顔で無視。

あいつらありなのかという幾人かの質問に教師相澤は「個性をどう活かすかだからあれもアリだよ」

との一声で鎮圧。

右手の負傷を押し出た緑谷が苦痛に喘ぎつつも、なんとかゴールラインを切って晴れて全種目が終了した。

「んじゃあ集計も終わったからぱつと結果発表するぞ。単純に各種目の順位ぼとの評価点を合計して比較した。口で言うのは浪費なので一括開示するからよく見とけ」

携帯端末を操作し発光表示が空間展開する。と同時に

「なお除籍つてのはな、ありやあ嘘だ。お前らを必死にさせるための合理的虚偽さ」

「はあああああああ——————————」

入学初日にA組生徒の9割が心をひとつにした。
「あんなのデタラメに決まっているでしょうに……!!?!!!!!!」きちんと考えればすぐわかりますわ」

とノリの悪い少女、長い髪を後頭部でまとめもつさりとしたポニーテールもどきになっている八百万が痛烈なツツコミを入れた。そ

の隣で同意するように頷く紙木城。

「そういうことだ。まあヒネて通じなかったのもいくらかいたようだがほぼ全員ノってくれてよかったよ。今日の結果が今のお前らの最大限、マックスパワーだつてことをちゃんと意識して今後活かせ。

各自結果を認識したらさっさと着替えて教室にもどるように。教卓にカリキュラムを記載した書類が積んであるはずだから、忘れず受け取ってよおく目を通しておけ。

あと緑谷。お前はその指をリカバリーガールんここで治してもらえ。他の連中と違って、欠点がわかりやすく浮き彫りになつてるんだ、早く改善しろ。明日からはもつと過酷な試練が目白押しなんだからな」

懐から保健室利用書を取り出しさらさらと署名して緑谷に渡すともう何も言わず立ち去っていった。緑谷は除籍発言が嘘だったことに気が抜けたのが呆けた顔でそれを受け取り突っ立ったままだった。

体力測定改め個性把握テスト総合点数順位

01 八百万百 02 赤熊ルパント 03 轟焦凍 04

紙木城綴子かみきしろつづりこ 05 光鎧路春臣こうがいはるおみ 06 爆豪勝己

07 斎女智満いづきめともみ 08 飯田天哉 09 常闇踏陰 10 障子

目蔵 11 尾白猿夫 12 切島鋭児郎

13 芦戸三奈 14 麗日お茶子 15 口田甲司 16 砂藤

力道 17 蛙吹梅雨 18 青山優雅

19 瀬呂範太 20 上鳴電気 21 耳郎響香 22 葉

隠透 23 峰田実 24 緑谷出久

○

激動の個性把握テストで雄英ヒーロー科の洗礼を浴びた春臣たちだったが、それ以降の制限はきわめてありきたりな授業内容で、例え雄英高校ヒーロー科といえども高校だということに気付かされた。

あえて特筆すべき点があったとすれば、それはあの「平和の象徴」オールマイトが教職に就くと表明してきたことだろうか。

圧縮ゴムをさらに高密度に圧縮して、無理矢理体に詰め込んだような発達した筋肉で構成された巨躯を、派手な色のスーツに包んで教壇

から自己紹介する様はなにやらコミカルでもあったが、その溢れ出る圧倒的なザ・ヒーローというオーラは平和の象徴と呼ばれることが伊達ではないことを示していた。

彼の正式な授業は翌日からということなのでそのときは挨拶だけで終わったが、生徒たちは完全に魅せられ口々に「英雄まじパネエ」「さすが日本一の学校だよね!」「画風が違った! 普通のスーツなのに!」「ナンバー1ヒーローから直々にご指導いただけるとはなんと恵まれているのか!」などと口々に興奮を形にしたのである。

ナチュラル・ボーン・ヒーローと世間から称されるほどの人物が、その秩序維持活動にかけられる時間をわざわざ費やしてまで英雄ヒーロー科の教師をやることに内心疑問を持った春臣だったが、オールマイト自身で次代のヒーローを育成しようと考えたのだとしても不思議ではないかと思ひ、この年にヒーロー科に入学できたことを喜んだ。

そして波乱含みの初日の授業をすべて終わらせ放課後。

「光鎧路くんと斎女くんも電車だろう? 駅まで一緒に行こうじゃないか」

てきぱきと帰宅準備を済ませた飯田がきちっと椅子と机の位置を整えて言った。すでに教室からは何人か退出しており放課後特有の緩んだ空気が流れている。

普通科の生徒であればここからさらに部活の見学などに行ったりもするのだろうが、彼らヒーロー科の生徒たちはそんなつもりは全く無いようで部活の話題など少しもあがることはなかった。

自動化され学年ごとに区画単位で分けられた昇降口から3人が出ると、飯田が前方をとぼとぼと縮こまり歩いている緑谷を発見する。持ち前のきびきびした動きでもって早足で近づくと、肩に手をやると同時に発声し緑谷を驚かせていた。

「指はもう治ったのかい?」

「飯田くん!? びっくりした……指は、うん、リカバリーガールのおかげで」

胸を撫で下ろしつつ返答する緑谷に春臣も話しかける。

「リカバリーガールの治療ってどんな感じだった？」

「え、あ、えーっと」

「ボクは光鎧路春臣、こうがいじはるおみ 苗字でも名前でも好きなほうで呼んで。こっちの無駄に胸のでかいのが齋女智満いっきめともみ」

「ムネツ!？」

緑谷が裏返った変な声を出したが、3人はそれを無視した。どうか春臣は智満に頭を叩かれてそれどころではなかった。

「えっと、光鎧路くん、リカバリーガールの治療はね……」

緑谷の言うところによると、リカバリーガールの個性による治療は、怪我をした本人の自己治癒力を促進させることであり、つまり本人の体力依存。だからあまりに重傷だったり多数の怪我をしたり、連続して重傷を負ったりすると彼女の個性では治癒するどころか逆に衰弱して死ぬことすらありえるものだという。

「じゃあ緑谷くんは自壊しないように個性を使わないといけませんね」

「そうそう、飯田に聞いたぞ入試のこと。あれぶっ飛ばして手足骨折したんだって？ なにかやるたびにそんななっていたら、卒業する前に病院送りになるかもしれないぜ。ていうかよくそんな自壊個性持っていて五体満足で高校生にまでなれたな。いやまあ超パワーなんて日常生活で使いどころないか」

「う、うん……そうだよな。本当に早く調節できるようにしないと……」

「しかし相澤先生にはやられたな！ 俺はもうこれが最高峰雄英か！

と感銘まで受けたというのにまさか嘘とは！」

飯田が右手でアゴをさすり左手を振りながら朝の出来事を話題に出す。

「いえいくら自由が売りとはいえ教師の独断で除籍は感銘を受けるべき場所ではないのでは……?」

「まあヒーローなんてヘタしたら死ぬから、育成段階で駄目なやつは切るっていうのはわかるけどな。成績が振るわない者は切られていくのは社会の常だし……。あと残った人員に割ける時間が割合で増

えるわけだし」

「だが教師ともあろうものが嘘で生徒たちを鼓舞するとは決して褒められたことではないな!」

「飯田はちよくちよく早合点して自己完結するところがあるからなあ。ボクも騙されたが!」

そういうのは方便という。それを当人たちに告げるのはどうかと思うが。

「みんなは付き合い長いの? 学校が同じだったとか?」

「ハルくんとは幼馴染なのでもう16年くらいになりますか。飯田くんとは中学からの付き合いですね」

「あ、じゃあ光鎧路くんと斎女さんも聡明中なんだ、凄いね」

「凄くないよ。というかそれを言われるのはむしろ今現在じゃないかな? ボクらも緑谷も雄英ヒーロー科に入れたんだし。こういうのを世間からは凄いや言う」

幼馴染か……。緑谷が思わしげにこぼしたそれは幸い誰の耳にも届くことはなかった。

「ねえ4人ともく、駅まで行くの? ちょっと待ってく」

振り向くと可愛らしい歩幅でかけてくるクラスメイト女子が一人。ソフトボール投げで∞なんていかれた記録を出していた少女だ。

「君はたしか∞女子!」

飯田が端的に印象に残った事柄を結びつけて、ある意味とても失礼な呼び方をする。

「いや彼女はたしかうら」

「麗日お茶子です!!! えっと飯田天哉くんと斎女智満さんと光鎧路春臣くん、それに緑谷……デクくんだったよね!」

「デク!?!」

麗日の名前確認に緑谷が素っ頓狂な声で叫ぶ。困惑する4人。

「え? だって爆豪くんが」

「あく、あれってそう読むのか」

「なんだか字面は良い感じなのに読ませ方がちよつとつらいですね」
「出る久しくと書いてデクと読ませる命名だったのかい緑谷くん!」

「ああああれはかつちゃんを僕を馬鹿にして呼んでるだけで、名前は「いづく」って読むんだ」

「え、そうだったんだ。ごめんね緑谷くん！」

「ふうむ、つまり蔑称か」

「しかしまあ酷い渾名をつけられたもんだ、木偶で」

「でも緑谷くんも今かつちゃんと呼んでましたし、付き合いは長そうですね」

「うん、かつちゃんとは幼馴染で、ちっちゃいころから今まで学校も全部一緒なんだ」

木偶の坊のデクという渾名といい、個性把握テストのとき怒鳴りつけながら飛びかかろうとしたことといい、二人はいわゆるいじめっこといじめられっこの構図だろうかと周りは思ったが流石に口にするようなことでもなかった。

「んーでも”デク”ってなんか”頑張れ!” って感じの響きが好きだな私」

「そうか？」

「いや無理があるだろう麗日くん！」

「ちよつとよくわからないセンスです」

「ンモー！ そう思ったんだからいいの！ 私の中で！」

「ハイ、デクデイイデス」

なにがそんなにヒットしたのか顔中をトマトのように赤くしながら硬直した緑谷がそれを受け入れた

「緑谷くん!? 浅いぞ！ 蔑称だったんだろう!? 一体どうしたんだ」

「いやそのコペルニクスの転回というか、胸を打たれたというかむにやむにや」

「コペ…?」

その緑谷のうぶな慣れてない様子に目ぎとく反応する春臣。

「高校入学初日から青春か緑谷」

「いいいいいいいやそんなことはないよははははまさかそんな」
「熱いですね」

5人はそのまま校門を出て駅へと向かう。

だがそんな5人を、いや正確には一人を呼び止める声があった。

「おいデク、てめえちよつとツラ貸せ……」

髪が八方へ尖っている目つきの著しく悪い少年。爆豪だった。

「かつちゃん!?!」

瞬間的に焦りを見せ声もうわずる緑谷。麗日は爆豪からにじみ出ている苛立ちに当てられてしまったのか、若干青ざめて引いている。

「モブどもは関係ねエから消えろ」

緑谷の目を射抜くようにまつすぐに見据えたまま告げる爆豪に思わず口を挟んだのが飯田だ。

「モブとは仮にもこれから一年間を共に学ぶクラスメイトに何という言い草だ！ 君はっ」

「まあまあ飯田。わかるけど落ち着こう飯田。今ここで言い争いしてもしょうがないし飯田」

飯田特有のきびきびした身振りを抑えつつ春臣が呼び止める。

「彼らもなにかワケがありそうだし、まだボクらの出る幕じゃないよ。とくに今日見知ったばかりなんだしさ」

「そうですね、多少言葉遣いや素行が乱暴でも、緑谷くんが私達に何も言わないなら口を挟むようなことじゃありませんし。緑谷くんももしなにか酷いことをされたら隠そうとせず相澤先生にすぐ打ち明けるんですよ？ こういうことはしっかりと口に出して公にしないと良くないことになりがちですのよ」

「え、いや。えーつと……」

歯切れ悪く返答できない緑谷と、あたかもこれから私刑すると見なされていることに対して、何か不満か抗議でもあるのか聴こえるようにツバを路面に吐き捨てる爆豪。麗日はまだ引いている。

「それじゃあまた明日、御機嫌よう二人とも。ほら麗日さんもそんな引いてないで行きますよ」

「ウチあんなん見たの初めてや……」

「さようならだ二人とも。まったく。爆豪くん！ 君はその言葉遣いを今のうちにどうにかしないと本当に立派なヒーローになれないぞ

！」

「関係あるかボケ!! さっさと消えろ」

「まあまあ飯田。いいから飯田。な? じゃあまた明日な緑谷、爆豪も!」

飯田は憤懣やるかたないといった様子だがしぶしぶと春臣に従い場を離れ始めた。

それをなだめつつ春臣がちらりと緑谷の様子を伺う。彼らは敷地内へと戻っていくところだった。

学内ならばまさか暴力沙汰ということは無いだろう。何をするかは知らないが、呼び名がたとえ蔑称であろうと渾名であるならば付き合いも長いのだろうし、滅多なこととも起きないはずと樂觀視し、それ以降気にするのをやめた。

場の空気が若干悪くなったのは確かだがそれも駅に向かい進むにつれて和らいでいく。

駅ビルが見えるころにはすっかり談笑しており、智満の個性による産物の鳥や、麗日の指先にある肉球など自分たちの個性や趣味、好きなテレビ番組や俳優などというとりとめのない会話に花を咲かせていた。

「明日のヒーロー基礎学は楽しみだねというところで、ボクらは4番線だけどみんなは?」

「あ、私は1番線だよ」

「俺は8番線だな」

「見事にばらばらですね、じゃあ改札でさよならですか」

そういうことになった。

そして4番線。周囲にはちらほら雄英生徒がいるがクラスメイトは見当たらない。

「さっき飯田くんが言っていましたけど、大食堂ではあの白米ヒーローのランチラッシュが調理を取り仕切ってるそうですよ」

「そういえばそんなことも言ってたな。しばらく弁当で良いと思ってたからあまり突っ込んで聞かなかったけど、お前は食堂行きたいの?」

「いえ、私もお弁当です。今日は教室で食べましたけど、明日からはいろいろ行ってみませんか？」

「なんだか嫌な予感がする。春臣はそんな思いを顔に露わにしなから智満へ向き直る。」

「いろいろって？ 屋上とかか？」

「それもありますけど、中庭とか関係者にだけ公開されている植林公園があるそうですよ。最低限のお手入れがされてるだけの憩いの場だそうです」

「はーん、まあいいけど案内は任せるよ」

「なにやら楽しそうな智満に悟られないように軽くため息をつく。」

ホームに放送が響き、ほどなくして電車がその姿を見せた。

○

「ただいま」

智満ともみを送り届けてから春臣が帰宅すると、玄関先に朝にはなかった革靴があるのが目に入る。

父のものだ。事件が佳境だからしばらく帰れないとか知らせてきたはずだが、入学式の朝には間に合わなかったからせめて下校時刻には間に合わせようと思ったのだろうか？

「おかえり春臣、パパだよ」

そんなことを思っていたら居間から赤い髪を短く切りそろえ鼻筋の通った偉丈夫が出迎えた。よく通るバリトンが玄関に染みわたるようだ。

「靴見りやわかるよ親父」

「うーん、手厳しい。智満ちゃんは一緒じゃないのかい」

「とくにうちに寄る予定ないからさっさと帰ったよ」

靴を揃えながらややぶつきらぼうに父・夏輝なつきへ返答する春臣。

「おや残念。女子高生になった智満ちゃんはさぞ綺麗だろうと思ったのね」

「おいエロ親父」

「はっはっはっ冗句。ジョークだよ春臣。で、パパたちの母校はどうだったね？」

「なんつーかでかいね。校門も監視センサー付きで、昇降口もものしいバリケードかって感じのブロックで学年分けされてたし。やっぱり有名だからヴィランにテロられたりするのかな」

ネクタイを緩めつつ父の言葉に所感を述べる。

「パパが入学する前に一度だけそんなことが起こったそうだよ。当時からあそこは実力のあるプロが教師をしてたから事なきを得たそうだけど、被害がまったくなかったから届け出もしなかったらしくて半ば学校の怪談みたいな扱いになってたね」

それじゃ事実かどうかわからないのでは？ 春臣はそう思った。

「まあいいや。着替えてくるよ」

告げて二階の自室へ。

ザックを放り投げ、ネクタイを解き、制服から普段着にしているジャージへと着替えベッドへ腰掛けると人心地がついた。そのまま寝っ転がり学校であったことを思い返す。

「…………… ああそういえば」

再び起き上がるとザックに手を突っ込み、教科書よりは薄めだがプリントというにはややぶ厚目の、つるりとした手触りの紙束を取り出した。年間の授業要項の記載された書類である。個性把握テスト終了後に配布されたもので、その名の通りどのような授業と行事があるかが解説されたものだ。

飛び込むようにベッドにうつ伏せになるとぱらぱらと気軽にめくる。

「とりあえず大変そうなのは体育祭と夏休みにやる強化合宿くらいか。なにすんだ強化って。体育祭は……見に来そうだよなあ。全国ネットで生中継されてるしweb配信もあるってのに現場に来そうだよなあ」

「体育祭？ もちろんパパたち揃って見に行くつもりだよ！ 仕事？」

ははっ馬鹿を言っちゃあいけない。息子の晴れ姿と仕事とどっちが大事だと言うんだね？ んん？」

夕食時にそれとなく聞いたら案の定だ。げんなりとした顔になる春臣。

「硝子しよっこも？」

「学校サボって見に行くよ。生で見られるのは兄さんがヒーロー科合格したおかげです」

両親の前で公然とさぼり宣言しながら拝む真似をする良い性格をしている妹に呆れる兄。

「でもね、やっぱり体育祭は事務所のみんなで行こうかって提案はスタッフ一同満場一致で却下されてしまったよ！ みんな手厳しいね！ 少しは遊び心がないとあんな仕事長く続けてられないということを教えこまないといけないな！」

「いやボクら子供のためにも治安維持活動はしようよ」

「同感。ヒーロー飽和社会だって言っても暗い夜道で美少女がひとり歩きは怖いし」

息子と娘の冷たい視線が父親に突き刺さる。

「まあ二人とも言うようになったわね。でも大丈夫よ、夏輝さんのとこのスタッフは粒ぞろいだから、オーナーがいなくても一日と言わず一週間くらいなら業務を回せるから安心よ」

「全くもってその通り。いやあ春臣の雄英合格が決まったときもね、もくもくうパパ浮かれちゃって仕事が手につかなかったりしたんだけどあの子たち本当に優秀でパパ困っちゃったね！ 実に得難いスタッフだよ」

カレイの煮付けを切り分けながら現役ヒーローとしてはあまり褒められないことを平然と抜かす父親。

「独立したら困るんじゃないのかそれ……」

「なあにその時は彼らの前途を祝福しつつ少し昔に戻るだけさ。事務所を開設したときから彼らがいたわけじゃないんだぞ？ パパこう見えてもちよつと凄いな」

「知ってるわよ」

硝子が聞き飽きたというように答える。

春臣も少し辟易してきたので話をそらすことにしよう。「母さん、この煮付け美味しいね」

「カレイは春臣の好物だから、今日はいつもより頑張っちゃった」

「流石真緒だ。この味は料亭でもなかなか出せるものじゃない。いいかい春臣、お前も料理の上手な女性を捕まえて離さず食らいについてお嫁さんにするんだよ？　食事こそすべての要。頑強な肉体も健康な精神も研ぎ澄まされた個性も日々摂取している食べ物ですべてが決まるんだ。まあ智満ちゃんなら心配はないだろうけどね！　春臣が見限られないかが心配だなあ」

熱い茶をがぶりと飲む夏輝。

「なんで親父があいつの料理の腕を知ってたんだよ」

やや無然とする春臣。その顔で楽しそうにする両親と妹。

最悪だこいつら！

「いやいや毎年新年のご挨拶に伺ってるじゃないか。その時の宴会の出し物は一昨年くらいから、全部喜魅佳ちゃんきみかと智満ちゃんが作ってるんだぞ」

「去年は私も手伝いました」

「知らなかった……。いやお前はたまにうちの夕食の手伝いしてるから言わんでもいい」

「はあ？　なにそれ。酷くない？」

幼馴染の知らざる一面をさらりと告白されて少しショックを受ける春臣。夏輝は息子のそんな様子に

「あれ？　もしかしてこれ言っちゃダメなやつ？　あの子達の料理の腕が上達してるとか春臣に教えちゃまずかったやつかな？」

と若干慌てる。

「なにその気遣い」

春臣が味噌汁をすすりながらぼやく。

「大丈夫ですよ、そのくらいのことには隠し立てするようなものじゃ無いんですもの。貴夜美さんきよみもあの子達と台所を一緒にできるのが本当に楽しそうで。やっぱり自分の技術を娘に教えるって母の夢の一つよね」

「いえその……はい鋭意努力しますですはい。そんなことより兄さんは智満ちゃんにお弁当作ってもらったりしないの？　ちようど今お料理できることを知ったんだしさー」

この野郎こつちにパスしてきやがった。春臣が顔を向け目で硝子に抗議するも妹は素知らぬ顔だ。こういうときは過剰反応しないでさらっと流すのが良い。または朝のように逃げる。そう思い口を開く。

「まあそのうちな。雄英は学食もあるし。知ってるか？ うちの学食ってあのクックヒーローのランチラッシュユが仕切ってたんだぜ」

「へえー。災害現場でお炊き出しとかやって支援してるのはニュースで見たことある。結構フットワーク軽いよねあの人」

兄が露骨に話題を転換したことに妹は気づかないふりをして乗っけてあげたのだった。

これが光鎧路家の団欒。

第03話 戦闘訓練組み合わせ&第一戦

雄英入学二日目。

初日とほぼ同じ時間に家を出て、遅刻などとは無縁の登校をした
はるおみ とおみ
春臣と智満。

この日の午前中の授業はいたって普通の高校教育課程であり、プロヒーローであるプレゼントマイクの英語の授業が、そのパンクファッションやDJスタイルな芸風とは裏腹にきわめて堅実に、言ってみればとても普通に消化されたこと以外特筆すべき点はなかった。

そして退屈な午前の授業が過ぎ去り、弁当や食堂で彩った気だるげな昼休みの次に来る午後の授業は、おそらくA組生徒のほぼ全員が心待ちにしてたであろう「ヒーロー基礎学」であった。

○ 「わーたーしーがー!!! 普通にドアから来た」

アメリカナイズされた陽気な笑い声とともにヒーロー衣装でオールマイトが教室へ入る。

大振りなりアクションで入室するかと思えば、自分で言っているようにいたって普通に扉を開けている。教師としての意識の成せる技だろうか。

「シルバーエイジのコスじゃん!」「うっわやっぱり画風が違いすぎて肌が」「普通のスーツと違ってヒーローコスだと威圧感パネエ!」

教壇の前まで進むと発達した筋肉をむきむきと誇示するようなポージングでそのまま続ける。

「ヒーロー基礎学とは! ヒーローの素地を作るために様々な訓練を行う科目だ! もちろんこのクラスはヒーロー科だから単位数も最も多い!! 頑張ろうな!」

空気を弾き飛ばすような音をともない、身振り手振りを加えるアメリカンスタイル。さらに

「早速だが本日の授業内容はコレだ! 戦! 闘!! 訓!!! 練!!!!」

突き出す右手に握られたプラカードには「BATTLE」の英字。直球だ。しかも一言ずつにポージングを変える芸の細かさ。

生徒たちもいきなりの戦闘訓練におのき沸き立つ。中には武者震いする者や獰猛な笑みを顔に広げる者もいた。

「さあああああ！ 活目せよ！ 少年少女たち!!」

オールマイトが教壇にあるパネルを操作すると黒板横の壁が音を立てて稼働する。

重低音を伴いながらせり出すそれは特殊プラスチックで覆われた棚だ。

中には見やすいように大きく番号が割り振られた超小型コンテンツケースが並べられている。その番号は出席番号で、ケースにはそれぞれ生徒たちのヒーローコスチュームが納められている。

ヒーロー科を擁する学校はそれぞれが独自のサポート会社と提携していて、そこが関係者各位のコスチュームを作ってくれるというシステムが確立している。

ヒーロー免許を持つ教職員とヒーロー科の学生は、役所で発行される「個性届」と、写真などの自分が必要だと思う「身体情報」、それとスーツに盛り込んで欲しい機能や付属物という「要望」、これら3つを書類にまとめて事務に提出する。するとその書類は学校から提携サポート会社へ送られ、そこに勤めるプロのデザイナーやエンジニアたちが各々に適したスーツを作ってくれるのだ。

このシステムを被服控除と言う。

ただこのシステムで油断できないのは、所属しているデザイナーたちもその道を邁進するプロという自負があるのか、要望を逸脱しない程度に、稀に逸脱していることもあるが、自分らのセンスでアレンジや改良を加えてくることだろうか？

教室の隠されたギミックを目の当たりにし、そこに自分だけのスーツがあると知った生徒たちは、授業内容が明かされた瞬間以上に興奮して思わず音を立てて席を立ててしまふ。

オールマイトは彼らの興奮に水を指すようなことはせずただ集合場所だけを伝えた。

そして集合場所であるグラウンド・βへ続々と集まる生徒たち。

その名の通りに初日の個性把握テストで使用したグラウンドとは

別の訓練施設である。雄英高校ヒーロー科には個性を使用した授業が多々あるため、個性運動に適した施設が複数用意してあるのだ。

すでに何人かが着替え終わって出てきており、思い思いの場所で待機し、全員集合を待っている。

「ハルくんちよつと手間取りましたね」

「なんか要望と違うところがちよこちよこあつてね」

春臣はドライスーツのような全身をびったりと覆うスーツをアンダーとして着込み、フード付きのボレロジャケットを羽織っている。腰元にはカラビナやホルダーが無数についたベルトを2本交差するように巻きつけ、足首をしっかりと保護する構造になるように要望を通した特殊合金の鉄骨入りブーツ履いている。

彼の個性を考えれば、そこまでスーツの肉体防備性能を高める必要は無いであろうが、そこはサポート会社のこだわりなのか浪漫なのか、防弾・防刃・耐熱・耐寒・防塵・保湿・保温・各種性能は最新の技術と理論により保証されている。

春臣のスーツも要望からは若干のアレンジがされており、首元の布を強引に引つ張ると柔らかく伸び、目出し帽のような形状にまで変型させることができるのだ。せっかく防塵素材を使っているのだからという計らいだろうか？ さらになんと暗視機能と対閃光防御機能や望遠機能まで備えたゴーグルと、酸素ボンベ付きのガスマスクやナックルダスター付きのグローブまで付属していた。まさに至れり尽くせりといったところであろうか。

春臣からしたらそれらは全く不要だと思いはしたのだが、個性を発動していないときには有用なので、ことさらに不満を言うほどの変更ではなかった。というかこれ費用はいくらかかってんだ。

「ハルくんはそのフードかぶるとなんだか変質者みたいですね」

「凄い失敬なこと言うねお前！　なんだよお前なんか……その。なんだそれ完全に巫女装束じゃん。むしろお前の普段の仕事着の領域だろそれ」

春臣の言うように智満のスーツは白衣しらいに緋袴ひかまと完全に巫女装束だった。

周囲の生徒からも、巫女や。巫女がおる。と囁きが聞こえてきていた。

「正式なものとはもちろん色々違うんですけどね。ほら、履物も草履じゃありませんし」

智満が袴を持ち上げて見せた足元は、たしかに足袋に草履ではなくブーツをそれっぽくデザインしただけのものだった。装束の下は春臣のスーツと同じような素材で出来たインナーを着込んでおり、異なる点といえば全身スーツではなく上下で分かれていることだろうか。

そんな風に談笑していると続々と着替え終わった生徒たちが集まってくる。

西洋甲冑じみたスーツにスパンコール付きのマントを羽織り、赤い派手なサンングラスを着用した青山優雅。

快適な素材で出来たシンプルなノースリーブにスパッツで素手足、腰元に各種多機能小物を収納するためのベルトをつけた赤熊ルパント。

胸元をむき出しにした、けばけばしい色合いで迷彩柄のノースリーブスーツとファーボレロ、顔にはドミノマスクをはめた芦戸三奈。

ウェットスーツに小物を吊るすホルスターやベルトを設置し、頭には大きなゴーグルバイザーをかぶった蛙吹梅雨。

フルフェイスかつフルアーマーで腰元からパイプを背面まで伸ばし、身動きのたびに金属音を立てる飯田天哉。

バイオスーツに手足を保護するアーマーを付け、透明なマスク付きのヘルメットをかぶる麗日お茶子。

空手着を基調としたスーツを着込み、尻から伸びた胴体ほどの太さの長いしっぽを肩に掛けている尾白猿夫。

肘と膝から先がむき出しな特注ドライスーツにシールドハーネスとベルトにホルダーを複数つけ、足元は頑丈そうなブーツで固め、眼鏡を外している紙木城綴子。

耳元に小型の変電機を装着し、それ以外はほぼジャージに思える軽装のチャラけた上鳴電気。

歯車のような肩アーマー以外上半身裸の、フェイスガードを付けた

切島銳児郎。

ジョギングに出るかのような簡素なスーツに胸元にある開いた口のシンボルが目立つ、岩のような質感を備えた大柄な少年・口田甲司。口と鼻と目と後頭部以外を包む全身スーツにポーチを複数つけたベルトを巻いた筋肉質で体格の良い砂藤力道。

ノースリーブのシンプルスすぎるボタン付きスーツで口元はマスクをし、前髪を前方に流す巨漢、障子目蔵。

細長く垂れ下がり先端にプラグの生えた耳たぶと脚部のスピーカー仕込みのブーツが目立つ、レザーの上下でまとめたラフなスタイルをした三白眼の耳郎響香。

ゼロハンテープをモチーフにしたフルフェイスマスクと肩アーマーな若干悪者側な印象を受ける瀬呂範太。

黒い道中合羽のようなマントで首下から足元まで覆うように羽織っている鴉頭人身の常闇踏陰。

白いスーツにベストを取り付け、その左半身を氷の意匠をした物々しいパーツで覆った、どこか澱んだ目をした轟焦凍。

一对のグローブと一对のスニーカーが動いてるようにしか見えないう透明少女・葉隠透。

手榴弾モチーフのごついアーマーで固めた両手前腕が目立つ威嚇的なドミノマスクで刺々しい爆豪勝己。

緑色のジャンプスーツに肩と肘にパッドを備え、オールマイトのような触角がマスクにおっ立てられている緑谷出久。

頭部の玉がもこもことした背の低い三頭身を、オーソドックスなヒーロースタイルの全身スーツとマント、そして巨大なベルトパンツが目立つ峰田実。

体の前面を大きく開けた赤いレオタード風のスーツと、申し訳程度のベルトスカートで最低限の部位を覆い隠し、ベルト背面には厚い辞典を備えている八百萬百。

「ン~~~~~！ 実に良いじゃないか皆！ 格好良いぜ!!!」

A組生徒が全員集まったのを確認すると、オールマイトが開口一番そう告げた。思わず照れくさそうにしたり、堂々と胸を張ったり、そ

の賞賛への反応も人それぞれ。

「見た目から入るってのも大事なんだぜ少年少女。さあああああ！
自覚するのだ!! そう！ たった今！ この瞬間から自分はヒーローなのだ!!!」

ヒーローとして着飾った生徒たちを鼓舞するようにナンバー1ヒーローが雄叫びを上げる。

それに触発され、ぞくりと背筋を走る身震いとともに自信がみなぎったかのような表情になる生徒たち。そんな彼らを満足そうに見渡したあとに、まったく同じ調子で授業開始の宣言をする。

「さあ始めようか有精卵ども!! お待ちかねの戦闘訓練のお時間だ!!」

雷声が残響する。それが収まるまえに生徒から挙手があった。

「先生！ ここは入試の演習場ですが、市街地演習を行うのですか!」
飯田ががしやがしやとアーマーの音をたてて真っ先に疑問を投げかける。

「いいや、演習からはもう二歩ほど踏み込んでみるのさ！ これからやるのは屋内での対人戦闘訓練だ!! ヴィラン退治は主に屋外で見られる。実際現場を目撃したのも中にはいるだろう?」

だが！ 統計で言えば屋内のほうが凶悪ヴィランの出現率は高いんだよ。このヒーロー飽和社会において、真に賢しいヴィランは屋内にこそ潜んでいる!!」

監禁、軟禁、誘拐、ブラックマーケット、ヴィラン組織の密会、禁制品の裏取引、賭博、等々おおよそ考えうる様々な悪事、どす黒い欲望の発露は密室で秘密裏に行われている。

それらに入念な捜査を重ねて追い込んでいくのはもちろん警察の仕事であるが、個性の使用を禁じられている当局ではうかつに手を出せない場合も多数存在する。そんな場合は当然のようにヒーローが協力を申し出ることになる。

「君らはこれから二人一組に別れ、その上で2対2の屋内戦を行ってもらう!!」

まだ完全には打ち解けていないクラスメイトとのコンビプレイだ。

生徒たちに波紋が広がる。

「おつと忘れちゃいけないのが、それぞれがヒーロー役とヴィラン役をこなしてもらうってこと！ ヒーロー役はもちろんヒーローとしての思考を、ヴィラン役はヴィランとしての思考を考えて行動してみてくれ!!」

「基礎訓練もなしにですか？」

「その基礎を知るためにまず実践さー！」

言ってることは無茶苦茶なようだが、歩くよりもまず走ることが適した場合もあるということだろう。

「勝敗はどうつけるのですか？」「思う存分ぶつ飛ばしていいんすね？」「あの、また相澤先生みたいな除籍するなんていうことはありませんよね……？」「組み分けとヒーロー役とヴィラン役はどのように分かれればよろしいですか？」「ねえこのマントやばくない？」「お互いよく知らないし相談タイムはどれくらい設けられますか？」

「ンンンンおおおおおおお~~~~~!!! 聖徳太子イ!!!」

はつきりと天を衝くように挙手して質問を投げかけている飯田はともかく、ほかは口々に好きなように疑問点をぶつけていた。

オールマイトはたじろぐも内ポケットからメモ用紙を取り出し指導内容を読み上げる。

「ゴホン。いいかい少年少女！ 状況設定は“ヴィラン”が“核兵器”をアジト内部に隠し持っていて、それを察知した“ヒーロー”が処理しようとしているというものだ」

核で。なんかアメリカンな設定来たぞ……。いきなり核かよ。本場だけあってやっぱおつかねえわアメリカ。と生徒たちからこぼれてくるがオールマイトはこれをヒーロースマイルでスルー！

「制限時間内に“ヒーロー”は“ヴィラン”を捕まえるか、または“核兵器”を確保回収することが勝利条件だ！ 確保はタッチすればそれでOKだ！

対して“ヴィラン”は制限時間まで“核兵器”を守り通すか、“ヒーロー”を無力化……つまり確保することが勝利条件だ！

わかったかな？」

いそいそと紙をしまい込み、ぐそぐそとどこからともなくテーブルを取り出す。そしてポケットをまさぐるとオールマイトが取り出すのは、あまり見る機会のなさそうな形状をしたサイコロ。

独特な形状をしているそれらは12面ダイスと24面ダイスだ。

「そーしーてー!! 組み合わせ及び対戦カードはこのダイスを使って決めるぞ!」

「サイコロ……って適当なのですか!?!」

「ランダム性重視はリアリティ追求ってことじゃないか?」

「プロは事務所が違っても場合によつては急造で連携チームアップすることももあるしそういうことも考えた組み合わせ方法じゃないかな」
衝撃を受ける飯田に、春臣と緑谷が持論を述べる。

「そういうことか……! なんと先を見据えた計らい! まことに失礼いたしました!!!」

直角に腰を曲げ頭を下げる飯田。ヒーローコスと相まってなにかのロボットのようだ。

「いいよ!! じゃあ早速振るぞ!! 賽は投げられた!!」
結果。

・チーム分け

01 蛙吹+爆豪 02 緑谷+葉隠 03 切島+芦戸 04

青山+紙木城

05 常闇+尾白 06 八百万+耳郎 07 齋女+轟 08

麗日+瀬呂

09 障子+峰田 10 口田+赤熊 11 上鳴+砂藤 12

光鎧路+飯田

・ヒーローvsヴィラン (左H・右V)

06 八百万+耳郎 V S 05 常闇+尾白

03 切島+芦戸 V S 12 光鎧路+飯田

09 障子+峰田 V S 07 齋女+轟

11 上鳴+砂藤 V S 04 青山+紙木城

10 口田+赤熊 V S 01 蛙吹+爆豪

02 緑谷+葉隠 V S 08 麗日+瀬呂

ということになった。

「チツ。これじゃデクを潰せねえじゃねーか……」

「ヒイツ」

「うーん、飯田とか。気心がそれなりに知れてるのはいいけど、できれば初対面の人が良かったかな」

「まあいいじゃないか。賽の女神が引きあわせたのだ。ヴィラン役とというのが不満だが鋭意努力しよう！」

「さて。少年少女諸君！ 見たところ知り合い同士も初対面同士もあるようだが、まずはモニタールームに移動しようか！ 次の説明はそこで行うよ！」

○

地下に設けられた薄暗いモニタールーム。壁面いっぱい超巨大モニターはいろいろなビルの外壁を映している。

皆が入室したことを確認するとオールマイトが口を開く。

「今はこのモニターに外観しか映ってないが、試合が始まったら内部の監視カメラから映像が来るようになっていく。試合をしてない少年少女はそれをよく観察して考えるようにね。講評なども拳手を求めるからそのつもりで！」

さてこれから3分間！ コンビでお互いの個性や得意なことについての相談タイムを取る。

昨日相澤くんがやった個性把握テストの段階で、目ざといものは皆の個性を見たりはしたろうけど、今回はチームアップだからより詳しく情報の共有をしてくれよ！ 中にはスーツに拡張機能を求めた少年少女もいるだろうしね！

そしてその間に私がみんなにアイテムを配布する！ チーム同士の会話に不可欠な小型無線！ と、さらに確保テープだ！ この確保テープを相手のどの部位でもいいから巻きつけた時点で”無力化し捕獲した”という証明になる！ いいね？

そしてヴィランチームにはその他にこの”核兵器”も配布する。これをビル内のどこかの部屋に置いてくれ。地面に固定してからてっぺんにあるボタンを3秒間押しこむと膨らむから気をつけるよ

うに！

では相談タイム、カウントスタートだ！」

正面巨大モニターに秒読み表示がされる。

クラスメイトでも今はヒーローとヴィラン。そんな無意識が働いたのか、対戦相手から距離を取るように離れ、自然と相談の声も細いものとなっていく。

ううん！ 皆真剣に取り組んでいるな！ オールマイトは画風の違う笑顔を途切れさせることなく、ヒーロー有精卵たちを感慨深げに見渡す。

ただその視線がじつは緑谷に行きがちなことには、生徒は当然だが当の本人ですら気付くことはなかった。

「今更言うことでもないが俺は下腿部のエンジンで加速できる。それと跳躍も得意だな。もちろんギアチェンジすれば巡航速度もそれなりに高い」

「ボクはこう……なんかよくわからない力場を発生して叩きつけたり……なんだろう？ 超パワーブーストって言い方でいいかな。まあそんな感じ。あとなんかたまに勝手に勝手に動く」

「俺は氷を出せる。冷やすだけじゃなくて加熱もできるから、出した氷を溶かすこともできる」

「私はごくたまに妙なひらめきがあります。感覚系ですね。あとはこのヤタが昨日テストでやったように、大きくなったりで攻撃や防御もかなりやれますよ」

「私は紙を自由に操れるわ。体のどこからでも紙を出せるし、昨日みたいなにつなげて立体物にすることだって出来るの」

「ボクはシンプル・イズ・ベストでお腹のここからビームを出せるよ。あんまり長く出すとお腹壊しちゃうけど、このイカしたスーツの補正もあつて多少は我慢できるとも」

”……動物とかにお願いして動いてもらえるよ……”

「ど、動物、か。こ、ここ、では少しつ、辛いな。お、俺は、か、体を自由に、へ、変型きよ強化させることが、でき、出来る」

それらの声が混ざり合ってなんだかよくわからない音の塊になっ

て反響する。

「はい終了！ 無線マイクと確保テープ、それと”核兵器”はきちんとして受け取ったかな？ よし、ではまずは尾白少年と常闇少年のヴィランチーム！ ビルAに向かって準備したまえー！」

オールマイトが端末を操作するとモニターにビルAの外観が映し出される。5階建てほどの特徴のない建物で、しかし外壁に大きくAと書かれている。おそらく他のビルも文字こそ違えど似たようなものだろう。

「君たちがこのビルAに入ったらその5分後に耳郎少女と八百万少女のヒーローチームが向かう。私の合図でヒーローチームは潜入開始してくれ。制限時間は開始の合図からきっかり10分間だ！ タイムアップの合図もちろん私が送るから、ストップがかかったら止まるんだぞ」

尾白と常闇が言われたとおりにビルAへ向かう。しばらくするとモニターにビルに入る二人の姿が映しだされた。

そして再びモニターに秒読み表示。

「さあヒーローチームも向かってくれ！」

耳郎と八百万も向かい、同じようにモニターにビルに着いたことが映しだされ

「では屋内対人戦闘訓練第一試合……開始だ!!!」

オールマイトの合図がマイクから伝わった。

○

最上階にて、尾白はモニタールームで言われたとおりに核兵器を膨張させ配置する。

「おお、本当にでかくなった」

「ムウ、さすが雄英脅威の技術力……仰天だな」

驚く尾白とそれを目の当たりにし若干引いている常闇。

「俺たちはこの”核兵器”でテロを目論む悪逆なヴィラン。ヒーローにその悪しき陰謀を暴かれこれから撃退しなければならないが、この”核兵器”も防衛しなければならぬ。さてどうする？」

「ヒーローは俺らのいる場所を探してるけど、逆に俺たちからもヒー

ローの居場所がわからないんだよね」

尾白が手をアゴに当てて考えこむ。

「一番良いのはここで待ち構えることだと思う」

「フム。探索能力の無い以上、攻撃と防衛に戦力を分断するのも愚策。かと言って二人で打って出るにはヒーローの居場所がわからず、探してる間に”核兵器”を確保される危惧がある」

「そう。だからこの部屋の入り口と、あとは窓を見張っていればいいと思う」

「よし。では俺たちが窓を見張るから尾白は入り口を頼む。黒影

ダークシャドウ

「アイヨッ」

常闇の呼びかけにマントの中から応える声があると同時にわだかまった薄暗いモヤのような何かが現れた。

それはみるみるうちに常闇本人とほぼ同じくらいの大きさになると、常闇本人の鴉頭に似たようなシルエットの形にまとまっていった。見れば翼らしき部位もある。

「聞いていたとおり窓の監視だ。ある種の持久戦に近いが油断が勝敗を分かつぞ」

「マカセナー」

ヴィランチームはこうしてヒーローチームを待ち構える構えを取った。

果たしてビルに侵入してきたヒーローチームは――。

「耳郎さん、突然ですけどこれを渡しておきますわ」

ビルに侵入してやや進むと八百万がパートナーの少女へと銃を渡す。

「いや拳銃って……じゃないな。テザーガン？」

耳郎はそれを受け取ると海外ドラマの刑事のように構えたり格好をつけたりしながら問い返す。

「そうですね。それならば不必要にヴィランチームを傷つけることなく無力化できますから。昨日の個性把握テストの様子を見る限り、皆さん健康そのもののようなので心配はないと思いますけどアンペア

など低めの設定です。……使い方は、今耳郎さんがおやりになっているように、狙いをつけて引き金を引けばいいだけです。安全装置などはついてませんので引き金は若干重いでしようからしつかり引き絞ることを忘れないでください。電極が相手へ刺さると一定時間電流を流しますわ」

八百万は自分も渡したものと全く同じものを取り出し握りしめる。「はいよ」

耳郎はテザーガンをレーザージャケットに差し込んで仕舞いこむと、廊下の壁際に寄り添いその特異な形状をした耳たぶを無造作に伸ばして挿入した。堅いコンクリート壁の小さなひび割れが出来たがしつかりとめり込んだそれは、建造物に巻き起こる音、すなわち振動を読み取り耳郎にビルの情報を与える。

「このビルって訓練施設だからなのかな。部屋にはあまり物が置かれてないみたいだね。でもヴィランチームがどこにいるかはわかったよ。最上階だね。二人ともそこでかたまってる」

「では一応慎重に進みましょう」

モニタールームではビル内部に多数仕込まれたカメラからの映像があらゆる角度で巨大モニターに投影されている。

モニターから流れるのは映像のみで音声はしない。それはオールマイトが耳につけている小型受信機にしか流れない設定だ。生徒たちは無音の映像だけで彼らがどのような考えで行動するかを学ばなければならぬ。

「さあ皆も考えながら見るんだぞ！」

オールマイトは成績をつけるための書類を構えながらモニターを見ている。

画面では尾白・常闇が”核兵器”のある部屋で身構えており、八百万が耳郎に何かを渡す様子が映されている。

ヒーローチームの行動を見た春臣が智満に疑問を口にする。

「八百万はアレどっから取り出したんだ？　ボクには体からによつきり生えてきたように見えたけど」

「私にもそう見えました。なんででしょうね？　体からものを自由に出

し入れできる収納個性でしょうか？」

「もしそうなら、準備が必要とはいえかなり便利だな」

「何持つてるかわからねえつてのは、戦うことを考えると怖えな。そういうや昨日のテストでもなんかいろいろ出してたっけ」

切島が言うと、さらに上鳴が続けるように

「ありやテージャーだなあ。ヒーローチームはかなり万端に倒す準備を整えてるぜ」

と自身が電撃個性だからか、八百万の取り出した武装を指摘して見せた。

「ヴィランチームは待ちの構えだね。迎撃には出ないみたいだ」

「どこにヒーローチームがいるかわからないからかな？」

「多分そうだろうね。ジリ貧になるかもしれないけど、それが一番安全な作戦なのかもしれない」

緑谷と麗日が真剣な顔でモニターを見ていた。そこに切島の大声が響く。

「しっかし地味な試合運びだな！ 尾白たちもただ待ち構えてるだけなんて男らしくねえぜ！」

「そうかしら？ 彼らが待ちを選んだのはおそらく索敵出来る個性を持つていないからでしょう？ 持つていたのならそれらしい行動に出てるはず。であるならば戦力の分散や入れ違いになることを考えると、緑谷くんが言ったようにああやって侵入経路を見張るといのは最適解に思えるわね」

「華はないけど堅実だよね☆」

紙木城と青山に突っ込まれる切島。しかし彼はなおも言う。

「けどやっぱこうガシガシぶつかりあいてえぜ！」

「脳筋か」「脳筋だな」「脳筋！」「泥臭いね？」

「おいおいおい！」

それぞれ思うことを口にしそれらが軽い意見交換になってる中、モニターではヒーローチームが最上階に足を踏み入れるところだった。

耳郎の集音ですでに最上階にヴィランチームがいることは把握している。

だから出来る限り足音を立てないように二人は慎重に歩を進めていた。ここまで登ってくる間にすでに八百万と作戦は考えてある。というかほとんど八百万発案である。

耳郎はうまくいくか軽い緊張で少し動きが堅い。喉元が引きつるような感触がしたのでつばを飲み込むと、ぐびりという緊張しているとき特有の嚙下音を聞いた気がした。

そして中央フロア入り口まであと少し。念のため耳たぶの先端を壁に挿しこみ内部状況を再確認する。変化なし。テザーガンを取り出しながら、それを伝える意味で八百万へと向かい頷いてみせる。

八百万は入り口の真横で屈んで膝立ちになる。耳郎がドアを開けるとすぐさま八百万が手に持っていた缶からピンを抜き、ゆるやかに室内へと放り投げた。2人は耳をふさぐ。

瞬間。閃光と破裂音。そして煙が巻き上がる。

同時に二人は突入した。

室内には光と音ですくんだヴィランチームがいた。ヒーローチームはすかさず狙いをつけテザーガンを発射。

命中！

「がっ!!!」

「ぐううう!!!」

二人は悶絶し、体を流れる微弱な電流で筋肉がつっぱり、床に倒れながらもつま先立ちのような姿勢で痙攣し始める。耳郎が駆け出し”核兵器”に触れた。

『WINNER！ ヒーローチーム!!』

○

「さあ！ 楽しい楽しい講評の時間だ！」

まだふらつく尾白と常闇を支えながら、終了の合図と共に瞬間的にビルAまで迎えに行っていたオールマイトがモニタールームに戻ってきた。

待機していた生徒たちからしたら、消えたと思ったらしいの間にかモニターにオールマイトがいた。

そんな風を感じたことだろう。それほどの早業で、熟練のプロでも

彼の動きを正確に捉えられるものはいないかもしれない。格どころか次元が違う。そんな風に思わされる出来事だった。

「勝つても負けてもそれは振り返ってこそ経験になるのさ！ 今回どころも目立って不手際があったわけじゃないな！ その上であえてベストを選ぶなら……それは八百万少女だね！」

力強く八百万へ向けて親指をおったてるオールマイト。

「さあその理由はわかるかな？ 分かる人！」

のりのりで拳手を求め、自分で呼び水のようにピンと腕を挙げるオールマイト。すると生徒たちからまばらに拳手が見える。その中でもひときわ目立つように右腕をまつすぐに伸ばす小柄な少女がいた。

「では紙木城少女。君の分析を聞こうか」

指名された紙木城へと注目が集まる。

「分析というほど大したものではありませんが失礼して」

咳払いをひとつ。

「まず先ほどオールマイト先生が言ったように、ヒーローチームもヴィランチームも私が見た上では選択ミスと思える行動はありませんでした。」

ヒーローチームは耳郎さんの個性で正確に相手の位置を把握しながら進んでいました。片やヴィランチームはそのような探索・探知のできる個性を持ちあわせていないようでしたので、「核兵器」のある最深部で待ち構え侵入口を見張る。あの状態でできる最善を取っていたと思います」

よどみなく言葉を紡ぐ紙木城に生徒たちは感心のため息をつく。中には憮然としている生徒もいたが。

「その上で八百万さんは相手を手早く無力化させるために、フラッシュバンとテザーガンという警察や現役プロでも使用されている鎮圧用非殺傷武器を持ち込んだこと、パートナーの耳郎さんにも持たせ、きちんと作戦を共有して万全を期したこと。これらが評価に値したのだと考えます。」

あえて難点を言うのならば、相手の個性次第ではそれらが通用しな

い懸念もあつたということでしょうか？

ですが情報は情報。昨日の個性把握テストで彼らに防御できる個性が無いと踏んだのでしよう。確固たる情報でないとはいえ、事件発生時に常に精度の高い確定情報を得られるとは限らないわけですし、それを踏まえた上で突破する勇敢さも加対象かなと思います。

私からはこれくらいです。先生、続きをどうぞ」

一礼する紙木城。

「うん、概ねそのとおりだね！ 今回大まかな”流れ”を八百万少女が作っていたというのがMVPの理由だ！ ヴィランチームもあの時点でやれる限りのことをしていたさ。どうしてもあの時こうしていれば、というもしもを考えることもあるだろうが、それもまた経験だ！

さあ四人とも待機列に戻って皆と同じようにこれからの試合から学ぼうじゃないか！」

第2戦

ヒーローチーム「切島＋芦戸」vs ヴィランチーム「光鎧路＋飯田」

舞台：ビルD

第04話 第2戦&第3戦

2戦目はビルDが舞台だ。

と言っても違うのは建物の階層と間取りくらいであり、訓練の段取りは当然先ほどと全く同じ。

ヴィランチームがまずビル内部へと入り、そこから5分後にヒーローチームがビルへと向かう。

そしてオールマイトのスタート合図を待つ。

「第2戦……開始だ！」

○

6階建てビルの4階層。その階段から最も遠い部屋に”核兵器を配置し、春臣は飯田とどのように対応するかの相談を始める。

「さてボクらはどうしようか。尾白・常闇チームみたいに専守防衛してもいいし、あえて博打に出るってのもありだと思うよ」

フルフェイスフルアーマーな飯田はその意見にしばし考えこむ。ガシヨン。

「芦戸さんと切島くん。昨日のテストで見るかぎり彼らは先ほどの耳郎くんのような探知探査できる個性は持ってないように見受けられたな。つまり探り探りビル内部を進もうとするはずだ。打って出るならそれが付け入る隙になるのではないだろうか？」

「そうだね。ボクらの有利点は彼らの目当てのブツがここにあると知っていること。で、提案なんだけどさ」

「拝聴しよう」

「ちよつとした賭けに出てみようと思うんだ」

春臣が子供っぽい笑みをその顔に浮かべた。

切島たちは入り口から入り、1階層の部屋をひとつひとつ覗き見しながら進んでいた。それはまさに飯田の想定していた通りの進行であったが、おそらく十人に聞けば十人がそのような想定しただろう。

切島は昨日のテストで見た飯田と春臣の個性を思い出し思わず喉を鳴らす。どちらも素早い。

彼の個性「硬化」は力を込めるようにして発動するものだから、彼

の反応を上回る速度で攻撃されたらひとたまりもない。ゆえに彼はほんの少しの変化すら見落とさないようにと思いつながら気を張って進んでいる。

切島が前衛となり周囲確認をしながら進行している。その配置は彼の個性が理由ではない。

彼の考える男らしさというものが、たとえ芦戸がヒーローを目指す同志だとしても、同い年の女子を前に置いて自分は後ろで進むなどということを許さなかったのだ。もし彼の個性が硬化でなかったとしてもこの二人の配置は今のようになっていたに違いない。

緊張を維持したまま進む切島の後ろで、きよろきよろと忙しげにあたりを見回しながら芦戸が声をかける。

「ねーねー切島あ」

「なんだ？」

「あのさあ、あたしが天井溶かして上に行くとかってアリかな？」

「はあ!？」

あまりに突拍子もない発言に切島は思わず大きな声で問い返してしまった。慌てて口をふさぐ。

「おっとと。どういうことだ？」

「階段とかって待ちぶせされそうじゃない？ 床と違って姿勢も不安定になるしさ。だからとりあえず1階層に”核兵器”が無いってわかったらどうかなくなって思ったんだけど……」

芦戸の個性は体の表面から粘液を出すことである。

その分泌液は芦戸の意志で組成を自在に変化させることが可能であり、粘着性のある粘液からコンクリートすらたやすく侵食する溶解液まで変化の幅は広い。

つまり彼女は壁面を溶かして足場を作り、天井に侵入口を開けたらどうかと提案しているのだ。

一聞するとそれは相手の裏をかく作戦だったかもしれない。だが「いや……たしかに意表はつけるだろうけど、俺らじゃヴィランチームがどこにいるかわかんねえ。うかつに穴開けてそこは相手の真下でしたってのは痛いと思うぜ」

「そっか。穴開けてもよじ登るのに時間かかるしね。うーん、じゃあこのまま慎重に進むしか無いっか」

溶かすにしても時間はかかる。その異常を気取られて待ち構えられたら、姿勢が不安定なところを攻撃される恐れもある。芦戸はそれに気づいて提案を取り下げた。

そして1階層の探索を終え、2階層へ上がる。

二人の耳がなにか重低音の振動をとらえた。だんだん近づいてくるその胃に来る響きはなにか？訝しむ間も無く答えはすぐに分かった。

飯田だ。

彼の個性によるエンジン音。それが響いていたのだ。

「見つけたぞー！ヒーローどもー！」

ふくらはぎから排気しながら階段を駆け下り、加速の勢いそのままに2階層の床、壁、天井と走り進み跳躍、十分に速度と体重の乗った飛び蹴りを切島へと放つ。

あつけに取られたとはいえ切島も只者ではなかった。瞬時に両腕を交差させて硬化し受け止める。

防御面から堅音が響く！

と、飯田が切島の腕を足がかりにトンボを切り、芦戸が噴出させた粘液を回避する。それは階段横の壁面にべったりと貼り付くと、そのままでろりとした質感を残してゆっくりと固まっていた。

危うげなく2階層床に着地した飯田はぼそぼそと何やらつぶやくとエンジン音を響かせ再始動し突進する。

「飯田ア！お前ひとりか!？」

「もちろん一人だとも！」

再び蹴りと堅音。

飯田は止まらない。

みたび

三度切島に蹴りかかると見せたがそれはフェイントで、切島は体を硬直化したまま足場とされた。跳ねた飯田は体を軽業師のように反転させ、天地逆になると天井を強く蹴り出し、芦戸へと襲いかかる。彼女が反応するより早く飯田の蹴りが打撃する。

「ンぎやつ」

「済まんな芦戸くん！　だがこれもヴィランの所業だ！」

「やつろ!!」

切島が振り向きざまに腕を硬直させ裏拳を放つもあっさりと回避される。

飯田は跳ねるように一旦離れるとすぐさま踵を返し、より速く接近し切島へと蹴りを飛ばす。

金属質な感触と堅音、それと疼くような痛みが飯田に伝わる。

「硬いな！」

「おおさ!!」

その隙に芦戸は蹴られた部位をさすりながらも立ち上がり体勢を立て直していた。そのまま少し離れ自身の個性で攻撃できる隙を探る。飯田から目を離していない。

加速の乗った飯田は床のみならず、現れたときののように壁や天井すら走破する。それはすなわち飯田の体力が尽きない限り、多角的な攻撃が切島たちを襲うということにほかならない。

飯田は加速し続け切島へあらゆる角度から蹴りを放つ。切島は2階層の階段際で釘付けにされてしまい、反撃の機をつかめず防戦一方だ。たまに拳を振るうも飯田の速度と噛み合わずに空振りしてしまい、体勢を崩し逆に飯田が付け入る隙を作ってしまう。

芦戸も襲撃直後に放ったものと同じく、体液を粘性の高い成分に調整して投げつけているが、飯田が切島に対してヒットアンドアウェイで、距離を掴ませない戦法を取っているのでイマイチ有効打にはなっていない。ただいたずらに乾いた粘液が増えていくだけだった。

芦戸は切島と飯田を放っておいて先に進むのもひとつの手であるが、飯田の脚から逃れられる個性は持つていない上に、背後から蹴り飛ばされたらそれで甚大なダメージを負う可能性もあった。先ほどは正面からの蹴撃だから意識を保てたが、背後からではそれもあやしいだろう。

では床を溶かすのはいかが？　それも却下だ。飯田は床だけを走っているわけではない。溶解液をやたらめったら投げつけたら面

倒を被るのは自分たち自身。

速度の利は飯田にある。だがしかし数の利は切島たちにある。彼らの脳裏にはこの2対1という状況をどう活かすかが渦巻いていた。

「さっきの対戦と違ってヴィランチームが一人オフェンスに出してきたな」

上鳴がモニターに映る状況を楽しそうな目で見ていた。

「飯田の機動力を活かす策。ヒーローチームを探るため、順繰りに階層を走り回ること、彼奴の体も暖気できてキレのある蹴撃を成さしめる。一石二鳥……モニターからは声は伝わらずとも、相談の様子から察するにこれは光鎧路の発案と見た。光鎧路侮りがたし」

「そうですね。飯田くんだったらおそらく防衛に専念しようと提案すると思います。これはハルくん発案で間違い無いかと」

すでにしやんと立っている常闇の分析に、智満ともみが同意し補強する。生徒たちは皆モニターから目を離していない。誰もが真剣に見ている。

対戦形式の授業がある以上、勝ち負けや対戦内容が成績に直結しているはず。さらにチームアップも求められるのならば、クラスメイトの個性やその運用、どのようなことが得意で何が不得意かを出来る限り知っておいたほうが良い。

そんな考えを誰もが自然に備えていた。

「あのお二人は出身中学が同じだったということなので、個性の把握も十全にできているわけですね。おそらく連携に関してはどのチームよりも上かもしれないわ。それにヒーローチームと相対したときの一瞬の間隙で、飯田さんは光鎧路さんへヒーローチームの居場所を伝えることができたはずですよ」

八百万がほぼ正確に戦況分析をすると紙木城が簡潔に言う。

「今のところヒーローチームがピンチということね」

「まあそういうことですね」

簡潔すぎた。

追い込まれつつあるヒーローチームはこの先の展開をどうするべ

きか？

自然とそんな目線でモニターを見る生徒たち。

「い、飯田がこのままく釘付けにして時間切れを狙うも、良し。こ、光鎧路が合流しても良し。今のところ、ひ、ヒーローチームはヴィランチームの行動にた、対応することしか出来ていない。い、飯田をどうにかしないと、完封まで、ありうる」

「光鎧路ちゃんも移動してるし、飯田ちゃんの助太刀に行くつもりかしら？」

「合流するにしても、飯田がもし捕縛されたらせつかくの先手が無意味になっちゃう。速度の乗った飯田が1対2でもなんとかやりあえてるが、下手したらその均衡も崩れる。万一そうなたら逆に光鎧路が数の利で押されて、一気にヴィランチームが不利になるかもしれない。勝ちたいなら光鎧路は急ぐべきだな。逆にヒーローチームは芦戸の粘液が当たれば一気に逆転できる、切島の踏ん張りどころってここか」

吃音症の少年・赤熊はヴィランチームの取りうる行動を2パターンに絞り、ヒーローチームへ辛口な予想をする。

そして春臣の行動から合流を予想する、くりつとした目と横幅のある口元でやや前傾姿勢の少女・蛙吹。

轟はそれらを補足し両チームの勝ち筋をざっくりとまとめてみせた。

さらに見学者が口々に意見を言うなか現場の戦闘は変化を迎えていた。

「オッラア!!!」

「!」

激震。

飯田の蹴り足に合わせて切島がその拳を叩き込んだのだ。

切島の硬度と飯田の速度が噛み合い、衝撃は飯田の脛のプロテクターに返り、ひび割れひしやげた。

目を見張る飯田。

「ハッハァー!!」

「カウンターとはやるな切島くん! だが!」

瞬時に体をひねり、切島の突き出された拳を逆足で蹴り下げると、返す刀で胸元を蹴り飛ばし離れる。

踏ん張りがきかず吹っ飛んだ切島は、位置取りをしくじったのかちょうど直線上にいた芦戸とぶつかり、からみ合って転倒する。

当たりどころが悪かったのか、二人はすぐさま立ち上がることができずに何やらもたついているが、その隙を見逃す飯田ではない。

プロテクターが損傷したせいで冷却装置が故障したのか、濁った排気音が下腿から発生していた。しかし飯田は構わず廊下を疾走する。長時間の戦闘に耐えられないと判断した飯田は、これで決めると言わんばかりの気合いの入った一蹴りを、立ち上がり振り向きつつある切島へと放つ。

堅音。

とはいかなかった。

飯田の耳に届いたのは湿りを帯びたくぐもった重い音。

脚から伝わるのは重く絡みつく泥沼のような感触。

「な!」

蹴り足が受け止められている切島の腕。

飯田の脚を抱え抑えこむように掴んでいる切島の両腕は粘液に覆われていた。

それは芦戸の個性による粘液だ。

粘度が高く、かつ切島ががちりを抑えこんでいるので脚を抜くことはできそうにない。速乾性まで備えているのかみるみるうちに乾いていき、もはや飯田の速度は殺されたも同然だ。

「うおおおおー! つらあああああああー!」

切島の気合一閃、飯田の体が持ち上がる。

「な!」

雄叫びをあげたまま床に叩きつける!

プロテクターの背面部が軋み腹部から背中へと伸びるパイプが歪む。さらに床面がひび割れる音が飯田の耳を叩く。

このままでは良いように打撃され、いやそれどころか確保テープで巻き取られてしまうだろう。

飯田の揺れる視界の中で芦戸が確保テープを取り出したのがわかる。

「ぐうっ……光鎧路くん、頼む！」

瞬間。

激音と共に天井が崩れた。

「えええっ!?!」

「ぬあっ！」

まったくの不意打ちにとっさに動けずその場に釘付けになってしまふ切島と芦戸。

もつとも切島に関しては、飯田を止めるためにすでに俊敏性を完全に捨てている状態ではあつたが。

反面あらかじめ打ち合わせしてあつた飯田は両腕を交差させて頭部をかばう。

崩音にまみれながら建材の破片に押しつぶされる3人。

溢れかえる土埃が晴れてくると、その瓦礫の山の上には淡い超力場で包まれた春臣が立っている。視界を遮る土埃を巨腕の形をした超力場で振り払うと、足元の瓦礫をひとつひとつ拾ってはあらぬ方向へ放り投げていく。

春臣の左前方で音を立てながら瓦礫が盛り上がると

「ぶっはあー！ 畜生なんだよー！」

と全身硬化した切島が上半身を抜けだしたのだ。手元は完全に固まった粘着液と、飯田の脚を抑えこんでるせいで防御態勢を取れなかったのだが、彼にはとくに問題ではなかった。

「おつかれ」

「あゝ！」

首元に確保テープを巻かれる切島。

「なにその手どうしたの。ってそれどころじゃないや、もうひとりがそこらへんに……」

すでに敗北判定の切島を捨て置き瓦礫をより分けていく。この男、

パートナーである飯田のことを全く気にしていない。

すると物音がした。まるで泥流が発生しているかのようなずるという音だ。

その音とともに瓦礫が滑り落ちていく。

「ぶはあー！」

接触している建材をどろどろにしながら芦戸が顔を出し一息つく。

あのわずかな瞬間にとっさの判断で頭をかばい、さらに上半身から溶解度と粘度最大の体液を滲み出して防御したのだ。

落下した瓦礫の衝撃は粘液が粘り強く受け止めそのまま溶かしてしまうから、それを貫通してくるわずかな衝撃を耐えれば良いだけだった。

現に彼女の体には擦り傷ひとつついていない。ただ周囲に溶けた断面をさらした天井の建材があるだけだ。

「はいおつかれさん」

芦戸が周囲確認し次の行動に移る前に手早く春臣は確保テープを切島と同じように巻きつけた。

「え？ ああああー！ー！ー！！」

『WINNER……ヴァイランチーム！！』

○

「さあ講評の時間だ！ 今回のベストは飯田少年だな！」

切島と飯田に付着していた粘着物質は、すでに芦戸が中和させ問題なく過ごしている。

消沈しているヒーローチームとは反対にヴァイランチーム、とくに飯田はそのオールマイティの発言も相まってフルフェイスマスクをしていても感極まり、落涙していることが伝わった。

「一番目立ってたからっすか？」

上鳴が軽く挙手しながら質問する。

「フムん？ 飯田少年は目立ってたかね？」

「え、まあ……オフェンスに出て一番頑張ってたようにも見えたし」

逆に問い返されて頬を指でかくくこすりながら自信無さそうにもごもごと応える上鳴。

「時間もまだあるし、みんなも思ったことを自由に発言してみてもいい！ 間違いを恐れるな！ 間違いという困難を乗り越えるのさ！」
その言葉に触発されたのか波打つようにそれぞれが思ったことを口に出していく。

「飯田の猛攻も凄かったけどよ、あれにカウンター決めた切島もなにげに凄くね？ 結局ダメージらしいダメージ入ってないっぽいし」

「芦戸ちゃんのアシストも光ってたわ……。最後の切島ちゃんとの連携でつけた粘液は飯田ちゃんの動きを封じ込めたもの」

「けどあれで切島は腕が使えなくなっちゃった。芦戸が確保テープを巻こうとして結果的に一箇所固まったから天井落としてでやられたってことだろうし」

峰田と蛙吹がヒーローチームを褒めるも、瀬呂が反論する。

「どことなくヒーローチーム側の視点に寄っているのは気のせいだろうか？」

「そうですね……。ですが私としては前線で動かれていた飯田さんよりは、最後の天井崩落までの絵図面を引いた光鎧路さんが影の功労者、いえMVPだと思います。」

「い、一理ある。だ、だがやは、やはりその策をじゅ、十全に活かすように動けた飯田がベストだった、と、ということじゃないか？」

「戦力の分散なんてある種の愚策で勝利できたのは、飯田の立ち回りがうまかったからだな。少しでもヘタを打ってたら芦戸に逃げられて各個に一对一の戦闘や、逆に2対1で飯田が負けるなんて展開もありえた。現に最後は捕まっていたくらいだ。芦戸は粘着液を設置罠にするか、最後のやつをもっと早くやれてたら、逆に2対1で光鎧路を相手にできて勝ってたかもしれないねえ」

オールマイトにこだわらず自分の考えを述べる八百万。それに同意しつつも要点を述べる赤熊。簡潔に戦闘の流れと反省点をまとめる轟。

八百万、赤熊、轟に前試合での講評を論じた紙木城を合わせた4人がA組の推薦入学者だった。推薦枠に値するだけの目を持っていると言えよう。

それらの議論にオールマイトは満足気に数度頷くと手を打ち鳴らし注目させる。

「皆も2回目で慣れてきたかな？ 私が飯田少年を選んだ理由は概ね轟少年が言ったとおりさ！ まあ出会って日も浅い急造チームに迅速で密な連携を求めるのは酷だが、現場ではそれが求められる場合も多々ある!! 今日それをやれるようになる必要は絶対ではないが、意識してみてくださいよ！ プロのお仕事ってやつをさー！

それと次の試合から私は誰がベストだとかわざわざ言わないから、それぞれがよく考えてみてくれ！ もちろん当事者たちもな！」

飯田たち四人を待機列に戻るように指示するとオールマイトは手元の端末を操作しモニターの文字表示を変える。

第3戦

ヒーローチーム「障子+峰田」 vs ヴィランチーム「斎女+轟」
舞台；ビルC

○ 3階建ての1階層、その大広間に立てこもるヴィランチーム。”核兵器”を設置しこれまでの2チームと同じく簡単な打ち合わせを開始する。

「轟くんの言うとおり1階層に立てこもることにしましたけど、どうしますか？ 索敵ならヤタを飛ばせば出来ますけど、その間は私にたまに直感が働くだけのただの少女です」

轟が窓を氷結させ侵入口を部屋の扉に限定する。がちがちに凍りついた窓枠はよほどの高熱か貫通力でもなければ突破できないだろう。

「その鳥は飛ばさなくていい。やることは変わらねえ。ここで待ち受けて撃破するだけだ」

「ヤタです」

「ん？」

「ですから、その鳥、ではなくてヤタです。名前で呼んであげてくださいね」

振り向きざまに指針を伝える轟に対して智満とみみはそう言った。どう

見ても柔らかな微笑みのにこやかな表情だが反論を許さない圧力が轟を苛む。

ヤタもそんな主と同調しているのか轟へ鋭い眼光を飛ばしている。「……ヤタは飛ばさなくていい。昨日そいつに乗ったのは見た。終わるまで乗つてろ、危ねえから」

轟の突き放すような声色。まるで、お前は手を出すなどでも言われているような印象を受けて、智満は訝しげな表情だ。

「もしかして轟くん一人でヒーローチームを相手するつもりですか？

この子も戦えますが……」

「必要無い」

ぴしやりと断言する。その個性に相応しい冷たい声だった。

「まああなたがそう言うならお任せしますけど……」

智満はヤタを巨大化させその背に乗る。ヤタは軽く羽ばたきホバリング。

轟は緊張も弛緩もせず、ただただ自然体で入り口に正対し、鋭い眼光を飛ばしてヒーローチームをじっと待ち構えていた。

モニタールームでは軽いどよめきが生まれていた。

これまでのヴィランチームの行動がヒーローチームに対して、多少なりとも時間を消費させようとして上階に位置取りしていたこともあって、この行動は意外なものだったのだ。

「1階層に構えて時間稼ぎもしねえたあ男らしいな！」

切島が拳を打ち鳴らし興奮したように言う。

「階段を登らせて体力の消費も狙わないなんて、よほど実力に自信があるのかな？」

「轟が部屋の入り口に真正面から向かって仁王立ちしてるし、自信はあるというのはそうかもしれない」

春臣の発言に尾白が同意する。しかし尾白の表情は訝しげだ。自分が一方向的に敗退したこともあるのだろうが、この対戦訓練がそこまで簡単なものではないと思っている。

「齋女ちゃんいづみめはヤタちゃんに乗っているし、どうするつもりなのかし

ら?」

首を傾げる蛙吹。轟だけでなく智満の行動も彼らに謎だと思わせているが、音声が聞こえていればここまで不思議がられなかっただろう。

「轟くんの個性ってなんだっけ? 氷を出すんだっけ? 床を凍らせればつるつるに滑らせられるね!」

葉隠の発言に得心が行く一同。

障子が触腕の皮膜を広げさらにその先端を耳状に構成し音声情報を拾っている。

彼の個性は肩口から生えている皮膜ある2対の触腕に自身の肉体部位を複製すること。

握力測定でその触腕を駆使し500キロをゆうに超過する記録を出したように、単純な力も兼ね備えており耳目複製による情報収集能力と合わせて堅実に強い個性と言えるだろう。

「1階層に一人。位置は南向きの大広間……それとかすかに羽撃く音もあるが足音はなし。おそらく昨日の持久走のように鳥に乗っかっていると思われる。どちらも動く気配はないな」

「余裕ぶっこいて1階層かよ。」核兵器 を守りながら戦うつもりか」

峰田がそれを聞きどこか苛立つように返す。

「決めたぞ障子! オイラはあの巫女っぱいを……揉む!」

「無視するがどう攻める? 窓際に細工する音もしていたから、正攻法で正面から行くしかなさそうだが」

「悲しいぞ障子い! 男ならあれを見て滾るものはないのか!! 大きく胸元を盛り上げてる巫女装束だぞ!」

峰田が重ねてそう言うのと障子はため息ひとつつき冷やかな視線を送った。触腕先すべてに目を複製してまで送る徹底っぷりだった。

「あ、はいしません、真面目に考えます。オイラの個性に攻撃力は無いからな。窓も塞がれてるなら横からもダメだろ。壁ぶっ壊して突撃もちよつとな。通信機はあるから塞がれてなければ入り口と窓か

ら挟み撃ちなんてのも出来たかもしれないけど」

真面目に考え込む峰田に障子はやや見なおしたような顔をした。といっても先ほどの峰田の発言がヒーロー候補生としてあるまじきものであり、おまけに障子はその顔の下半分ほどを大きなマスクで覆っているの、他人からは顔色などはつきりわかるわけではないが。

「あの二人にトラップを仕掛けるような個性は昨日の時点ではなかったから、正面から出会い頭で出たとこ勝負ということになるな」「おう、オイラのこいつで身動き取れなくすれば」核兵器にも楽にタッチできるぜ」

自信ありげに自分の頭部に生えている玉をぶにぶにと軽く叩く峰田。

彼の個性はその玉をもぎ取り相手に投げつけることにある。それは本人以外に凄まじく粘着力を発揮し、健康状態にもよるが、絶好調ならば丸一日剥がれないという優れものなのだ。

ヴィランを穩便に取り押さえられる可能性があるという点でとてもヒーローとして役立つ個性だろう。

それを掴みとる峰田のグローブがなぜ無事かという点、その掌部位は玉の成分を分析し粘着しないようにできているからだ。サポート企業の脅威の技術力が光っていた。

方針を決めた二人はビル内部へと侵入し、障子の触腕でつねに周囲の注意を怠ること無く確認しながら廊下を進み、正面の部屋へと臆さず向かう。推測通り罠が設置されているということもなく、二人は何事も無く扉前へ到着した。

二人は目配せし頷き合う。

峰田は頭の玉をもぎ取り両手で構える。玉はもぎ取った瞬間から生え変わり、見る見るうちにもぎ取られた部分と同じくらいの大きさへと成長し止まる。

それを確認すると障子は勢いをつけてドアを蹴破り突入した。

次の瞬間障子が見たものは、凍りつき煌めく部屋内部と、自分の胸元まで覆っている厚い氷。

それは正面に佇む轟から発生しており、その横で大鳥に乗って浮遊している智満は驚きの表情だった。

障子の隣の峰田などは、投擲体勢のまま頭のとっぺんまで氷漬けにされていて、まるでなにかの氷像のようだ。

「~~~~~っ!!?」

「ヒーローチームはもう身動きできねえけど、確保テープを巻く必要はあるかい？ 先生」

『……ムウ。WINNER……ヴィランチーム!!』

「うわあ」

思わず智満がそんな、若干引いたような声を漏らすが、部屋中が、いや廊下すら厚い氷に覆われており、目の前には完全氷漬けとほぼ氷漬けのクラスメイトが二人。しかも4月に吐く息が白くなるほど室温が下がっているのだ。無理もない反応だろう。

そんな智満の反応を知ってか知らずか、轟は峰田氷像に左手を触れると加熱し解凍していく。激しい蒸気が発生する。

「熱まで操るか……」

「解凍手段が無えのにクラスメイト相手にこんなことはしねえさ。まあ悪かったな。レベルが違いすぎた」

無事解凍作業が終わり、オールマイトの迎えでモニタールームに戻ってきた4人。

「講評……することあるかな？ 無いよな!? 私にはちよつと思いつかないぞ!」

新米教師オールマイトはぶん投げた。だがそれに生徒から異論が出るようなこともなく授業は進んでいく。

第4戦

ヒーローチーム「上鳴＋砂藤」 vs ヴィランチーム「青山＋紙木城」

舞台：ビルM

第05話 第4戦&第5戦

舞台はビルM。地上7階建て、地下3階建ての大型ビルだ。

ヴィランチーム、紙木城かみきしろは入り口から廊下に進みながら、その体の表面からぱらぱらと紙束をばらまき始める。そのほつれていく様はさながら分厚い本の綴じを切ったかのようで、どこか心地よい音が青山の耳を打った。

ばらまかれた紙々は風に卷かれるように吹き上がり、建物内部の床、壁、天井を所狭しと貼り付いていく。

「いきなり個性を使ってるけど、君はそれで何をするつもりなんだい？」

洗練されたしなやかな身振りで青山が紙を噴き出しながら前進する紙木城へと問う。

「設置罫よ。私は自分から出した紙ならなんでも出来るから、いつ？」

「どこで？ 何が？ どのように？ 紙に触れたかを把握できるの？」

「んんんん……凄くない？」

「そうね。そうなるように訓練を積んだもの」

青山の賞賛に紙木城は当然だと言わんばかりに返す。情報量が多すぎると捌き切れないことは黙っておく。情報は取捨選択が大事。

「それと勝手に決めるけど」核兵器はこのフロアに置くわ。入り口から廊下を一直線で結ばれている大広間。貴方の個性を考えてもおそらくそれがベストでしょう？」

「スーツに仕掛けがあるけどネビルレーザーは直進しかしないからね☆ で。その部屋に置く理由は教えてもらえるのかな？」

前髪を手で流すように払いながら青山が得意げに言う。

「純粹に時間を掛けたくないからよ。上階にもばらまいて、彼らが設置部屋に入った瞬間紙束で挟み撃ちにして、その隙を貴方の光線で打撃してもいいけど、それはどの階層でもやれること。ならここでもいいでしょう？」

「なるほど、轟くんと似たような感じってことだね。じゃあ僕は砲台に専念すればいいのかな？ 正直殴り合いは美しくないから苦手だ

し」

「異論が無いようだから安心したわ」

諒解が得られたので紙木城は、核兵器 を設置する。

そのまま窓に手のひらを向けると、そこから紙が何枚も射出されてべたべたと貼り付き、外からでは中を覗けないようになっていく。さらに頬や首筋、手の甲、指、とにかく露出されている皮膚表面から先ほどと同じようにほつれ、紙が凄まじい勢いでばらまかれ部屋中を埋め尽くしていく。

「さっきの轟くと似たような感じだね」

「そうね。彼が相手じゃなくてよかったわ。氷漬けにされたら面倒なもの。……貴方のビームも厄介だと思ったからチームで良かったわ」
「お褒めの言葉を頂き光栄だね☆ それじゃあ窓は破られる可能性もあるってことかい？」

自分のビームが厄介なら、その紙の壁も相手次第で貫通できると言っているようなもの。ゆえに青山は入り口に正面から注視するか、窓側にも気をつけるべきか確認のためにそう質問する。

「昨日のテストからすると、あの二人にそれほどの出力は無いと感じたわ。それに中から塞がれた窓を侵入口にしようなんて、よほどの実力がなければ実行しないでしょう。だから正面を向いていればいと思うわ。でも万全を期すのなら臨機応変に対応できるようにはしてちょうだい。例えば壁や天井を突き破って突入してきても無数にはばら撒いた紙々があるから超パワーがあらうと数秒なら拘束してみせるから」

「フフツ、肩からも発射口はあるから任せておき給えよ☆」

かくしてヴィランチームの準備は整った。

一方ヒーローチーム。

「なんか……すげえいっぱい紙が貼り付いてる。これ絶対ヤベーやつじゃん？」

「見渡す限り紙、紙、紙か。上鳴の電撃で燃やしたりできねえの？」

入り口からべったべたに紙だらけな内装に若干引き気味な二人。

砂藤が上鳴に過激な提案をしているが、それは上鳴から燃やせる紙

かわからないし、まず放火はヒーローとしてダメだろということ却下された。そのままビルの外壁に沿って何か手はないかと探りながら一周して再び入り口へ。

「もうなんつーか完璧主義！　って感じだったな。なにあれパラノイアか！」

「窓にも隙間なく紙を貼り付けるとは……さっきの轟のやつに触発でもされたかねえ」

考えこむように沈黙が二人を包む。刻々と時間は過ぎていく。

「けど多分あの部屋だろ。どうする？　お前なんかこー壁ぶち抜いたりしねえ？」

「やろうと思えばブチ抜けそうだけだよー。ヒーローが自発的に公共のつて設定の建物ぶつ壊すのはダメだろ」

「いやでも相手は一応”核兵器”持つてるテロリスト設定よ？　多少の損害は必要経費のうちじゃねえかな？　どうよ」

「そう言われるとなあ。やっぱ中の様子がわからねえとなあ。でも入り口からだ、このどう見てもやばい紙地獄突き進むハメになるか」

「……………」

「……………。やるか」

「やろう」

二人は足音を忍ばせて紙が貼り付けられている窓のそばまでやってきた。

砂藤はタブレットを取り出しそれを含む。それは砂糖を固めたもので一粒10グラム。彼はそれをスーツの付属物のケースに複数粒保管できるように要望を出していたのだった。

砂藤の筋肉が見てとれるほどにパンプアップし引き締まっていく。

彼の個性は糖分10グラムでパワーを5倍に増幅し、それを180秒維持することだ。だがその反動は大きく、使えば使うほど脳機能が低下していき、徐々に活動が困難になっていってしまうという恐るべきものである。

「！」

力を込める声も奇襲のために抑え無言で壁へ体当たりする。コンクリートが粉碎される音とともに大穴があき、砂藤は勢いそのままに部屋へと侵入を果たす。突撃した砂藤に遅れることなく上鳴が続く。

正面入り口を注視していたヴィランチームは完全に不意を突かれた形になったが青山は即座に行動した。

姿勢をそのままにビームを展開。スーツに仕込まれたギミックによりその光の奔流は肩口の特種部品から照射され砂藤へと直進する。

砂藤はそれを跳躍して回避！ だがそこで彼は無数の紙束に阻まれ、それらに絡みつかれながら床へと落下する。なんとか身をひねり足裏で着地し勢いを殺すもその数秒の硬直が命取りだった。

紙木城の手捌きで部屋中の紙々が躍りかかり次々に砂藤を襲ったのだ。その紙吹雪は八方から吹きすすんでおり、さながら紙の竜巻だった。

それらは見る間に彼の体中に何枚重ねにも貼り付き肉体を締め上げていく。竜巻が止むとそこには顔だけ出した紙の雪だるまが出来上がっていた。おそらく紙の厚みは数十cmにも及んでいるだろう。

「ふっぐぐぐぐ！ ぐぎぎぎぎぎ!!!」

砂藤は根限りの力を込めて脱出を試みるが紙の拘束力は硬く微動だにできない。

「まさかヒーローが建物に大穴開けて突入してくるとは思ってもみませんでした。これは私の反省点です。ですが2、3枚程度を貼り付けただけの壁面は突破できても、その紙だるまを破壊できるとは思わないでください。厚みが違いますので」

紙木城は告げるともう一人、上鳴へと目を向ける。

青山は核兵器へ近づけさせないようにと位置取りしビームを発射しているが、上鳴も発射口丸見えな直線的な攻撃を食らう理由もなくカウター気味に電撃を放っているのだ。

ビームを回避し電撃を放つが回避される。およそ千日手と呼んでもよさそうな戦況がそこにあった。

紙木城や競り合ってるお互いに知るよしもないが、青山はそのビー

ムを長時間照射するとお腹が下ってしまい行動不能になるという致命的な欠点があり、かたや上鳴も帯電許容量をオーバーすると脳みそがスパークして一定時間アホになるというどうしようもない反動があった。

そういう意味でも恐ろしい勝負と言えよう。

「……………」

紙木城は無言でその良い勝負な対決を一瞥すると再び紙吹雪を起す。

乱舞するそれに視界を奪われる上鳴。

「ンだ!？」

囲まれるとやばい。紙だるまになってしまった砂藤のようにならないために、彼は周囲に展開する紙々へと電撃を放つ。

上鳴の全身が発光し放電する。

しかし紙木城はそれを見ても紙さばきを止めない。

「くっそー!!!」

帯電していても意に介さず紙が次々と上鳴の体を覆っていく。すでにその足元を床と固定され動くことすらできなくなっている。

そんな上鳴の様子を紙木城が、すでに王手がかかっているも同然なこの状況で、全く気を緩める気配もなく冷たさすら感じる視線で見つめている。

青山も油断せず上鳴から視線を外していなかったが、それとはまったく種類の違う強さの込められた視線だった。

「どうやら紙の引火点まで熱量のある電撃じゃないみたいね。少し、ほんのちよっぴりだけど焦ってしまったわ。これも反省点。耐火紙を作るようになるのが今の私の課題」

そして紙だるまがふたつ出来上がった。奇しくも先ほどの試合と似たような光景だ。

『WINNER! ヴィランチーム!!』

○

「さて、皆はどう考えたかな?」

その問いかけに静かに挙手する生徒たち。

「では常闇少年の意見を聞いてみよう！」

オールマイトの指名が飛ぶと、それまで林立していた腕が下がる。常闇はそれを確認するとそのくちばし状の口を開いた。

「恐悦。紙木城が初手から紙を室内に散乱させ、準備を怠りなく入念に済ませていたのが印象的でした。モニターから見る彼女の個性からすると、あれをされたら手数で上回らない限り挽回する術は皆無かと。」

二人とも”核兵器”配置部屋の入り口を注視していたことから、そこから誘うことを想定していたと想像します。だがヒーローチームはそことはまるで違う壁面から奇襲気味に突撃してきた。にも関わらず冷静に対処できていた青山と、その攻撃で姿勢を崩した砂藤を見事捕獲せしめた紙木城の急造とは思えぬ連携も驚嘆しました。おそらく青山の個性がシンプルでやれることが限られていたから生まれだ連携だったと考えます。以上です」

「サンキュー常闇少年！ 要点がわかりやすかったぜ！ 青山少年はうまく”核兵器”を守る位置取りで上鳴少年を牽制していたつても見どころだったな！」

そしてヒーローチームも決して不手際があったわけじゃない！ 入り口から罠の気配を察して回避したことや、建物の壁を壊して突入する思い切りの良さとか！ 砂藤少年の突入にきちつと遅れず対処できた上鳴少年も光るところを見せた！ 文字通りな！ H A—H A—H A—！

惨敗といえる内容だと感じていた砂藤と上鳴は、そんなオールマイトの講評を受けて若干ながらも心が沈み込むのがおさまったことを感じる。訓練での失敗や敗北はそれすなわち糧なのだ。

「さあどんどん進もう！」

第5戦

ヒーローチーム「口田十赤熊」 vs ヴィランチーム「蛙吹十爆豪」

舞台：ビルG

○

「どこに」核兵器を設置しようかしら？ 爆豪ちゃんはなにか考えはある？」

正確な立方体をした三階建てのビルGの正面入り口廊下で蛙吹は爆豪へと問いかける。

「あ？ そんなもん天辺以外のどこにあんだよ」

ぶつきらぼうに応え、そのまま蛙吹の意見など聞く必要は無いとばかりに上階への階段を進む。蛙吹はケロと一つ鳴いて後をついていく。

爆豪から放射されているぴりぴりとした気配が空気まで張り詰めさせてるように感じるが蛙吹は気にせず歩を進める。意見交換など全くなされないまま最上階に辿り着き、爆豪はやはり何も言わず一人ずずんと大部屋へと進み、後ろにいる蛙吹に顎をしゃくり無言で指示する。

「……………。爆豪ちゃん、指示は言葉にしないときちんと伝わらないわよ」

「るっせえ。いいからさっさと置けよカエル女」

”核兵器”の設置完了すると蛙吹は爆豪へ向き合い口を開く。

「なにか作戦はあるかしら？ 私としてはこの部屋で防衛するのが良策だと思うのだけど」

「ハッ！ ひとつかみいくらのモブがやりそうなことはやらねえよ。打って出て実力でボコればそれで終いだ」

爆豪が獰猛な声色でそう言う可他にもう何も伝えるべきことは無いと思っっているのだろう、身を翻し肩を怒らせて部屋を出て行く。

組み分けで出来た急造チームとはいえ仲間を仲間とも思っていない態度だ。自分の実力に絶対の自信を持っているのだろう。例えば誰が相手だろうと負けはしない、絶対に勝つと。

残された蛙吹はただケロ……。と一鳴きするだけだった。

ヴィランチームの意思疎通が上手くいってないということを知るよしもないヒーローチームは建物前でなにやら相談していた。

「さ、さてどうせ、攻めるか……。こ口田は、な、何か考えはあるか？」

赤熊がビルを見上げながら自分のパートナーの口田にそう言った。
” 僕の声が届く範囲に鳥がいるかもしれないから、まず呼びかけてみるね”

口田が手話めいた手振りでそう告げると、口を大きく開き個性を使い動物へと声を投げかける。

「翼にて昼の空を翔けるものたちよ、聞こえますか？ もし聞こえているならばすぐに私の元へとやってくるのです」

口田の個性は呼びかけることで動物たちを自分の思うように操ることが出来るというものだ。しかしそれは彼の声の届く範囲の動物にしか作用しないため、付近にいなければまずなんの反応も現れない。同じ口上を2, 3度繰り返すとようやく3羽ほどの鳩が羽ばたいてやってきた。耳慣れた羽音と共にそのまま口田の足元に着地するとそれらは彼を見上げ首をかしげつつ鳴く。くるっぽー。

” あたりにはこの鳩くらいしかいないみたい。この鳩たちにビルの中を覗いてもらおうと思うよ”

「たの、頼む」

頷くとその通りに鳩へと命じて飛ばす。鳩たちはそれぞれ飛び立ちビルを何周かすると口田の肩に止まり耳元で鳴いて伝える。口田は聞き終えると礼を言い鳩を解放した。

” 蛙吹さんと” 核兵器” が最上階にいるって言った。あと爆豪くんは階段を降りてきてるらしいよ”

それを聞いた赤熊は困惑する。

「せ、戦力をぶ分断したのか。ど、どうしてそんな真似をし、したのだろう？ 打つてで、出るつもつもり、か……。まあいい。ならばお、俺は壁面をのぼ登って目的地へとちよ、直接行く。か” 核兵器” のタツチね、狙いだ。口田はばく爆豪に警戒しながら、ひき引きつけておけるか？」

” 自信ないけど頑張るよ”

弱気な目だが、しかしやれるだけやってみるという決意を込めた手振りを残し、口田は入り口からビルへ慎重に入っていった。

赤熊はそれを見届けると、口田の気合いに自分も負けぬようにと深

呼吸し肉体を変形させる。

腕の筋肉が張り詰めていき、そして伸長していく。手指と手のひらに無数の吸盤と細かい鉤爪が表れる。赤熊はそれを壁面にびたりと押し付けると吸い付くように貼り付いた。さらに脚の筋肉が盛り上がり獣脚状になっていく。右足の先を同じく吸盤と鉤爪で揃えらると壁に吸い付かせる。そして左足も同じようにしてから数度体を揺すって固定具合を確かめると、一步一步しっかりと吸着させ90度の登攀を開始した。

口田が薄暗い廊下を足音を立てないように進むと階段が見えてきた。迂になっており死角ができている。口田は爆豪が階下へ降りてきていることを注意しながらそつと階段へ近づいていく。

「よう」

ゆっくり顔を覗かせるとちょうどそこには爆豪がいた。

口田は即座に顔を引つ込め後退する。肉食獣のように爆豪が姿を現し、そして一度あたりを見回すと睨みつけるような鋭い目線で口田を射抜く。

「あ？ 一人か……。まあいい手始めにてめえを血祭りにあげてやる!!」

爆豪が巨大な手榴弾じみた籠手で固められたグローブの手のひらを連続で炸裂させ威嚇する。起爆物質が焼けた臭いが漂ってくるが、口田は両腕で顔面をかばうように軽く交差させて一歩後退る。目はそらさない。

「死ね！」

左手を後ろへ向け起爆。その爆破で生じた衝撃を推進力に口田へ突撃する。口田はそれに満足に反応しきれずただ横っ飛びに回避するしかできなかつた。

爆豪の振りかぶった右腕による爆破が壁面を穿つ。飛び散る破片とこびりつく煤。それを見た口田から言葉を失わせるには十分な火力だった。

「生意気にも避けやがんのかテメエ！」

口田が立ち上がるとすでに爆豪は腕が届く距離にまで接近してい

た。面前に見えるのは振りかぶる爆豪の姿。回避できないと判断した口田は両腕を重ねあわせ顔面を防御する。同時に炸裂音。「ぎっ!」

重量級の体が衝撃で揺れる。だが爆豪の攻撃はそこで終わらない。そのまま左手を振りかぶり叩きつける。響く炸裂音。その爆破の勢いで押されぬようにしつかりと両足に踏ん張りを利かせる爆豪。

「オラオラオラオラ!!!」
「~~~~~っ!!」

絶え間ない左右の連打。それを受ける両腕の皮膚の焼ける痛みとその焦げ臭さが鼻を刺激し、さらに鼓膜を打撃するような炸裂音が連続する。だが口田は引かない。硬く閉じた目尻からはうっすらと涙が滲んでいるが、まったく怯むこと無くその場でじつと我慢している。

口田が反撃しようにも爆豪の連打が途切れずにその隙を見つけられないのだ。ただ勦られるだけの一方的な展開。

「うざってえな! このクソデカブツが!! いい加減沈めやつつ!」

爆豪が吠えるとさらに回転が上がり爆破間隔も短くなる。心なしか火力も上がっている気さえする。

いやそれは口田の錯覚ではない。実際に上昇しているのだ。

爆豪の個性とは、その手のひらから分泌する液状の起爆物質を発火させるといふもの。彼の体温が高まればそれに比例して分泌量も増加するのだ。威力は尻上がり上昇していくだろう。

すでに口田のうめき声すら聞こえない。この蹂躪劇は口田が倒れるまで続くのかと思われたそのとき、爆豪の耳へ切羽詰まったような声音の通信が飛び込んできた。

『爆豪ちゃん! 敵襲よ!』

「あゝあゝ!?!」

『私ひとりじゃ抑えきれないわ! 早く戻ってき』

肌を鞭打つような音を最後に通信が途切れる。

「どつかでこそこそ隠れて狙ってやがるのかと思ったら……こいつら、舐めやがって!!!」

爆豪の体がわなないている。自分を無視されたことに苛立っているのだ。その鬱憤をぶつけるように、ダメ押しの一撃で口田を爆撃すると、その爆破反動に乗り階段へと加速する。

口田はそうはさせじと腕を伸ばすが、火傷の痛みと衝撃で体が痺れていてうまく力が入らない。それどころか涙で滲んだ視界と炸裂音でやられた耳では満足に動くことすら難しい。

彼が廊下に膝をつき倒れるのと同時に、爆豪は爆破で一気に一階と二階をつなぐ踊り場へと飛んだ。この跳躍力なら1分とかからずに最上階へと辿り着くだろう。

口田は心身に悔しさを充満させながら震える指で通信機をつなげる。

「ごめん赤熊くん、爆豪くんを抑えられなかった。そっちに向かったちゃったよ……」

赤熊は一人壁面を登り最上階窓枠の上部に位置取りすると、脚部を槌状に変型させて伸長させた腕による振り子の動きでガラス窓を蹴り割って突入した。手足を元通りに戻しつつ、乾いた破碎音と共に部屋へと侵入を果たすと蛙吹の大きな目と目が合う。

即座に腕を1メートルほどの鞭状にしならせ叩きつけた。

跳ねるようにそれを回避し蛙吹は赤熊へ素早く舌ベロを射出するが、その攻撃は姿勢を低くした赤熊には当たらなかった。舌ベロが口内へと戻るが早いか赤熊が個性把握テストで見たような獣脚へと変型させ突っ込んでくる。

「ケロ」

飛び跳ねてその直進を回避すると振り向きざまに赤熊の背中めがけて舌ベロを再度射出。惜しくもそれは赤熊の腕にはたき落とされ拘束することはかなわなかったが、その射出速度を警戒した赤熊はすこし離れ距離を取る。そしてまたもや肉体を変型し始める。

「爆豪ちゃん！ 敵襲よ！ 私ひとりじゃ抑えきれないわ！ 早く戻ってき」

決して油断していたわけではないが蛙吹は赤熊の蹴りを回避できなかった。

さきほど赤熊が見せた腕を鞭状にする攻撃、それと同じことをただ足でやっただけだ。それだけだが腕の一撃より速度も威力も段違いだったのだ。

正面から注視指していたにも関わらず脇腹に赤熊の脛蹴りが痛打する。低い呻きをあげて吹っ飛び、壁にたたきつけられそうになったが、なんとか痛みを耐えながら体勢をぎりぎり立て直すと、蛙吹はそのまま四つん這いの姿勢で壁面へとへばりつく。肘と膝の関節を柔らかに動かすことでその衝撃を和らげた。吹き飛ばされた衝撃のダメージはうまくやり過ごすことに成功していた。

その隙に”核兵器”を確保しようと向き直る赤熊。階下から怒声と炸裂音が聞こえてくる。蛙吹が通信機へ叫んだ数秒後に口田から震える声で知らせがあったのだ。爆豪が怒りとともに向かってきている。

しかし早期決着のため”核兵器”を確保しようと蛙吹へ背中を向けたのが赤熊の油断だったろう。その腰にぐるりと蛙吹の舌が絡みつくこと引っこ抜くように持ち上げられ天井へとたたきつけられた。

「むっ……い！」

衝撃で視界が揺れる。

しかし追撃が入る前に彼は天井に両手を穿ちぬき固定する。とはいえそのまま蛙吹と引つ張り合い、力比べをするつもりなどない。

彼は深く呼吸すると瞬間的に胴体を風船のように膨張させ、かと思えばその直後に今度は逆にまるでナナフシのように細くなる。その幅の落差で出来た隙間からぬるりと滑るように、しなやかに体进行操作し舌から脱出を成功させた。

「痛いわね赤熊ちゃん」

「こ、こちらにもわ割りと必死なのでな。こ、口田のためにもまけ、負けられん……」

蛙吹が攻めるように言う。拘束するために舌ベロを締め付けていたのだが赤熊が膨張したときに想定以上に引つ張られたことにより口内の根本がひりひりと痛むのだ。

赤熊が天井から落下しふわりと足音無く着地させると

「よくもナメくさってくれたなクソひよる長ア!!!」
扉を爆破させながら爆豪が部屋へと帰ってきた。

自分を無視されたことに腹を立てているのか、その目つきの悪さが普段よりも増してまるで犯罪者かと思わされるような表情になっていた。

「死にさらせ!!」

爆発を推進力に赤熊へと突進する爆豪。

口田へやっただのと同じ攻撃を放つが、赤熊は跳ぶ爆豪より高く跳ねてそれを回避。同時にスタンプするように蹴りを放つ。しかし爆豪はすでに前転しており赤熊の蹴り足は爆豪の髪の毛を数本散らすことしか出来なかった。

「めん、面倒だな、き、貴様」

「黙って死んでろ!!!」

蛙吹は軽く言葉を交わし合い正面から打ち合う二人を見ながら、赤熊の隙を探るように周囲をぐるりと回りこんでいる。赤熊は腕を槌のように膨張変型させ、爆豪の爆撃に怯むことなくその打撃を前腕部を外で押し出すようにしていなし、カウンター気味に胴体へ横蹴りを放つ。

爆豪はそれに痛痒を感じないかのように振る舞い連打をやめない。だが宝石がはめ込まれているような赤熊の青い目は、その猛攻を見切っているのかいないのか判然としないが爆豪の打撃をかわし、いなし、その都度爆豪の胴体へと拳打や蹴りを当てていく。

眼前で何度も炸裂している爆豪の爆破を恐れている様子は微塵もなく赤熊の表情は小揺るぎもしていない。

だが爆豪もやられっぱなしですませるほど大人しい男ではなかった。

赤熊の手捌きを何度も目の前で見てるうちに目が慣れたのだろうか、ついには自身の右腕の攻撃をいなした瞬間の赤熊の左腕をとらえたのだ。

「おつらあ!!!」

爆破。

!!!

肉の焦げる臭いが赤熊と爆豪の鼻をつく。

赤熊の表情がほんの少し歪むと爆豪の顎を勢い良く蹴りあげる。

呻きを挙げて掴んだ腕を離してしまおう爆豪。唇を切ったのか口元から一筋の流血が認められる。

赤熊は大きく飛び退き距離を取ると左腕の被弾箇所、手首からやや肘側へ近い部位に目を向ける。焼け焦げと火傷特有の皮膚の引きつりが生じておりさらに肉が抉れて血が滲んでいた。

「すぎ、凄まじい威力だな。か加減しているようだが、や、焼き切られるとおも、思っていないかった」

痛みを感じていないのか平然とした口調で言うと、赤熊のその傷口は瞬時に盛り上がり再生する。真新しい肉の色はすぐに馴染んで継ぎ目も見当たらず、それが一度爆破された腕だと思うものはおそらくいないだろう。

「あ、足をとめ止めての殴り合いはぶ分が悪いか。か数の不利もあ、ある……」

赤熊の言葉など聞く気のない爆豪はすでに駆け出していた。それに合わせて蛙吹も接近し、舌ペロを射出していたが赤熊の姿をとらえることはできなかった。

赤熊は直上へと飛び立ち爆豪の攻撃も回避する。足場となった床はひび割れめり込みができていた。跳躍時の踏み込みの威力がうかがえる。

爆豪はそれを読んでいたのか、ただの反射か、それとも天性の勘の成せる技なのか、空振りした爆撃をそのまま推進力へ転用し赤熊を追跡する。

だが赤熊はそこで止まっておらずさらに天井を蹴り飛ばすと斜めへ加速しそれを回避する。天井もめり込み砕け、その細かい破片が爆豪へと落ちかかる。赤熊から二人へ反撃する気配が無い。

赤熊はそのまま床、そして天井、さらに壁へと飛び跳ね徐々に加速していき爆豪と蛙吹の目を攪乱する。

筋肉を増加凝縮した手足を駆使し、縦の動き、横の動き、斜めの動き、軌道は不規則を心がけて一定の動きは見せない。予測をさせない

ための動きだ。

爆豪や蛙吹がそれをなんとか撃ち落とそうと動くも、回避と高速軌道に専念した赤熊に触れることはおろか、着地点に近づくことすら至難の業であった。

コンクリートが割り砕かれる音が連続し、それが徐々に速度を上げて遂には連なる打音となる頃には二人の目にはただ線が流れていくように見えていた。

「す、すまん、あす蛙吹。い、痛いぞ」

その声が聞こえたときにはすでに、蛙吹の腹部……みぞおちに赤熊の掌底がめり込んでおり、蛙吹は返答どころか反応も呼吸もできず吹き飛ばされた。その先には爆豪がいる。

「当たるかこんなんもん！」

言うように慣性が乗った蛙吹を軽々と回避する。だがしかし、それとほぼ同時に赤熊が突っ込んできたのは見切れなかったのか、腹部に蹴りを受けてしまう。

「げほっ」

空気を吐き出しつつも、爆豪は反射的に右腕を振るい赤熊の顔面を爆撃する。

しかし蹴りの威力までは左腕で相殺できなかつたようで、そのまま吹き飛ぶとその先には蛙吹が転がっており、彼女に追突するとそのまま壁面までもんどりうって二転三転し、止まる。

蛙吹は失神したのかぴくりとも動かないが、爆豪は痛みにも歯を食いしばって堪えながら起き上がろうとしている。膝はがくがくと震えていた。

だが赤熊は大きな火傷を残す顔面で見届けると、床を一蹴りして跳び”核兵器”直上の天井へ着地し、触れた。

『WINNER！ ヒーローチーム!!』

○

失神したままの蛙吹は、雄英高校が誇る技術の粋のひとつである小型搬送用機械「ハンソーロボ」が丁寧に保健室へと運んでいく。お互い言語で行動確認しているのは、おそらく人間へ伝えることも目的と

した開発者の配慮であろうか？

それを心配そうに見つめる口田の腕の火傷も相当なものだが、自分の試合の講評とあと残り1試合とその講評の10〜20分くらいなら我慢できるとオールマイトに告げ、そのまま4人がモニタールームへと戻ってきた。

モニター前にオールマイトとともに並ぶ3人の生徒を見ると、すでに赤熊の顔面の火傷は腕と同じく完治していた。爆豪は俯き黙っている。

「さあ皆の意見を求めるぞ！」

「うおっす！」

オールマイトが言うが早いか挙手する切島。

「では切島少年に聞いてみよう！」

「俺がベストだと思ったのは赤熊っす！ 壁よじ登ったり爆豪と殴りあったりすげえ動きしてたり、とにかく派手で最後まで”核兵器”を確保してたんで！」

殴り合いを見て興奮したのか切島がやや大きな声でそう言う。それにオールマイトは頷くと

「うんうん、たしかに赤熊少年はチームを勝利に導いたと言えるだろう！ ありがとう切島少年！ さてほかになにかある者はいるかな!?」

再び意見を求めた。ほかに何人かの挙手があり、オールマイトはその中から八百万を選ぶ。

「はい、オールマイト先生。私は口田さんを推しますわ。」

赤熊さんが登攀して窓から侵入できたのも、口田さんが上手く鳩を使って内部の情報を獲得したからでしょう。独断専行で階下へ降りていた爆豪さんの存在も知れていたのなら、戦力が減少した”核兵器”側へ手早く攻め込み短期決戦を挑むのは挑戦的でしたが良策だったと思います」

一呼吸し彼女はまだ続ける。

「もし口田さんの情報収集がなければ、ヒーローチームは一階で爆豪さんに釘付けにされて時間切れがあったかもしれません。赤熊さん

も最後は俊敏かつ立体的な動きで圧倒してはいましたが、ヴィランチームを完全撃破までは出来ずに”核兵器”を優先的に確保しての勝利ですから、口田さんの得た情報はとても大きな利点をもたらしたと思います。

爆豪さんの独断と口田さんの個性が噛み合った結果がチームの勝敗を分けたと私は考えます。以上ですわ」

「ありがとう八百万少女！ 彼女の言うように口田少年は小さいながらもとても大きなことを成した！ 残念ながら会敵してからの戦闘では防戦一方だったが、それも赤熊少年が侵入するのに十分な時間を稼げていたからね！ 戦闘で負けたとはいえ無闇に沈み込む必要はないぞ！ 要はなにが目的なのか？ を考えて行動し、チームにどのように貢献するのか？ だからね！」

オールマイトがまとめ、3人を待機列へと戻す。爆豪は終了から今までの間ずっと張り詰めた表情のままだった。

第6戦

ヒーローチーム「緑谷＋葉隠」 vs ヴィランチーム「麗日＋瀬呂」

舞台：ビルI

第06話 第6戦&放課後

ビルIは七階建てでどの階層にも窓が複数取り付けており、日当たりと風通しのよさそうな建物だ。

瀬呂は麗日を先にビルへと進ませると肘の口から個性による産物であるテープを吐き出し、キープアウトテープのように張り巡らせて入り口を封鎖する。

瀬呂の生み出すテープは粘着性が高く、これを撤去するだけでヒーローチームの時間を消費させることができるだろう。ここから入ろうとせず窓や侵入できそうな箇所を探させるだけでも同じく時間の消費だ。そしてそのまま瀬呂は1階層のすべての部屋の窓にテープングしてちよつとやそつとでは破れないようにしていく。

「瀬呂くん、”核兵器”どこに置こうか？」

麗日がそれを見ながら作戦の要となる”核兵器”の配置を相談する。

「そうだなあ。やっぱいつちゃん上じゃない？ 葉隠も緑谷もちよつと正面から相手したくない個性だし、時間稼ぎできるならしときたい」

「そうだね、ほかのヴィランチームのみんなもだいたい最上階だったし。あと葉隠ちゃんなんて見えないもんね」

「緑谷もあの超パワーはやっべえよ。正面对決で殴り合いとかマジでしたくないわ」

そんなことを話し合いながらテープングを済ませて階段を登っていく。瀬呂は当然のように麗日のあとをいき、4階層の階段あたりからテープを適度に張り巡らせて障害物を設置する。本当は1階層から階段をうめつくす勢いで貼り付けたかったのだが、終了後このビルから出て行くときのことを考えてしまったのだ。

緑谷たちが素直に階段を登りテープを一枚一枚剥がして進んできたのならそれでいい。だがそうしなかったら？ 入り口や窓、さらに階段のテープを見れば持久戦を狙っていることは気づかれるだろう。ならば”核兵器”を最上階に設置することにも考えつくはず。つい

さつき赤熊がやったような壁面登りを緑谷がああ超パワーで再現してやってきたとしたら？ 帰り道がただただ面倒くさくなる。

そんな庶民的と言えるようなしみつたれた考えが頭に浮かんでしまったのだ。もしそうなっても瀬呂なら自分のテープで固定してラペリングするようにビルの壁面を降りられるだろうが、同い年の女子をそれで運ぶのは気が引ける。失敗したら怖いし。

とはいえ時間稼ぎはやれるだけしておきたい。そんな思考が4階層階段からのテープピングという行動に出させたのだ。

そんな感じで最上階につき、大部屋に”核兵器”を設置すると、瀬呂は例によって部屋中にテープを所狭しと張り巡らせる。これは葉隠対策だ。隙間を縫って接近してきても必ずどこかで姿勢に無理が来て転倒するだろう。

本当なら扉もテープで封鎖したいところだが終了後に出るとき面倒臭いからやめる。というか想定された状況だと自爆するわけでもないなら、”核兵器”をさらに移送するなりヴィランたちが退去するなりというリアリティを持たせるためにもここはこれでいいのだ。瀬呂はそう思った。

「ふう。まあこんなもんだろ。あとは待ちだな」

「あーなんか瀬呂くんに任せっきりになっちゃったね……」

なにやら申し訳無さそうに麗日が言い出す。

「俺がベストだと思ったからやってるからいいんだよ。麗日の個性つて待ちとか罨とかあんま向いてなさそうじゃん？ ヒーローチームがやってきてからが勝負よ」

「うん。そうだね」

ヒーローチームがビルの入り口に差し掛かるとそこにはべたべたに封鎖された様子が目に飛び込んできた。

「うわー。これ絶対瀬呂くんの嫌がらせだよ！」

「う、うん。効果的なやり口だね」

透明人間少女・葉隠が装備しているグローブとブーツがばたばたと動く。地団駄を踏んでいるらしい。

「どうする緑谷？ 窓とかから入る？」

「そうだね。一応確認するだけしてみようよ。僕は右回りに行くから葉隠さんは左回りをお願い。ちょうど入れそうな窓があったら通信機で連絡するね」

「りよーかーい」

二人は左右に展開してビルの外観を見て進む。そして入り口の反対側で再会。

「窓もべったべたでダメだったよ!」

「うん……なんていうか徹底してたね。こうなったら普通に入り口から入るしかない気がする」

とぼとぼと入り口へ向かう二人。緑谷は手を口元へとやり何やらぶつくさ考え事をしているようだ。

「このテープは剥がすしかないね。僕がやるよ」

緑谷はグローブでテープを無理矢理引き剥がす。

その間に葉隠はなにやら本気出すからと言いながらグローブとブーツを脱いだ。不自然に浮いている超小型通信機がなければ、彼女がどこにいるか肉眼では察知できないだろう。個性による特殊な感覚器官や視界を持つものならば見抜けるのだろうか、あいにくヴィランチームの、いやA組の生徒にもそのような個性を持っている生徒はいなかった。

緑谷のグローブに貼り付いたテープは壁に拭うようにしてもなかなか取れない。かなり力を込めてごしごしこすってようやく取れるというしつこさだった。

その間に葉隠が先行して1階層の探索をし終えていた。階段を登り2階層の探索をする。1階層と違いテープの障害がまったく見当たらず、不意打ちの恐れもあるため警戒しながら緑谷が部屋を一つそつと侵入し内部を探ってる間に、葉隠が手早く他の部屋を確認していた。

「さすが透明人間だね……。こういうミッションだと心強いや」

「戦闘力ほぼないけどね」

朗らかに声が聞こえるが具体的にどこにいるかは判然としない。あ。通信機あった。

そんな感じで探索をしながら上階へ向かう。葉隠はどうだか全くわからないが緑谷は顔つきから察するにかなり緊張しているようだ。そして4階層の探索を終わらせさらに上へ向かうと葉隠がうんざりしたような声色で

「うわ……出たよ」

と思わずこぼしてしまった。

粘着テープ地獄が目の前に広がっているので無理からぬことだろう。

せつせと緑谷がテープを剥がしていき葉隠が階層の探索をする分担作業。そのたびに壁面に拭いつけて無理矢理テープをグローブから剥がしていたからか、それは新品だったものがすでにかなりへたれてきていた。

そして最上階。

ここもやはりテープ地獄だったが階段と違うのは頑張れば通れそうな隙間があることだろう。

ふたりは若干疲れ気味にのそのそとテープに触れないように隙間を通って行く。そのまま通路を行くと開けた入り口から同じようにテープまみれになっている広い部屋が見える。交差するテープのせいでのはつきりとは見えないが、”核兵器”らしき大きな物体が見え隠れしている。

葉隠がそれを確認すると内部のヴィランチームに聞こえないように、小声でささやくように通信機を介して緑谷へ声をかける。

『私が先に行くね。通信機は不自然に見えちゃうから持つて。私がまずつたら声かけるからお願いね』

「う、うん。わかった。気をつけて」

どんな小声でも明瞭に伝える性能の通信機を緑谷へと放ると葉隠はそのまま部屋へと入っていく。無論テープに触れないようににぎりの隙間をくぐったりまたいだりしないといけないのでかなり難易度の高い進行に思える。

緑谷は受け取った通信機をスーツのポケットにしまうと、足音を立てないように部屋の入り口へと近づきかがむとこっそりと中の様子

を伺う。

葉隠が今どこらへんを進んでいるのかまったく分からないが、それはヴィランチームも同じで麗日と瀬呂の二人は窓や入り口のほうを警戒している。

幸いと言ってよいかはわからないが、張り巡らせたテープは瀬呂たちの視界も塞ぐことになるので、緑谷が入り口から少しばかり顔を覗かせてもあつさりが見つかるという心配は無いようだ。

このまま葉隠が”核兵器”を確保して終了になるかもしれない。じわりとそんな発想が緑谷に浮かぶ。

それだと自分はただテープを剥がしていただけで、個性も使わずなんの役にも立っていないことになってしまふ。憧れのオールマイトに見られている実践訓練でほとんど何もしなかった。自分はそれでいいの？ そんな考えが緑谷の脳裏に染み渡っていくが、だからといって無闇に突撃するほど彼は無謀でも自分勝手でもなかった。ただじつと部屋の入り口に膝立ちになって待機している。

このままパートナーの葉隠が勝利条件を満たすならそれでいい。透明人間である彼女に粘着テープを触れさせずここまで連れてこれたことこそが自分の成し遂げたチームへの貢献だ。だがもしなにかしくじりがあったらその時はさつき彼女が言ったように自分がフォローしよう。やれることはひとつしかないけど、持てる力の全力で。決意しながら緑谷が固唾を飲んで見守る。気づいているかどうか、彼の顎先から汗が一筋垂れて床にうつすらと滲んでいた。

「タイムアップもそろそろ近い感じかあ？ ん〜、やっぱヒーローチームが最上階に来てないってことは無いんじゃないかねえかって思うけど、どうよ麗日？」

瀬呂が訝しげに部屋中を見渡し麗日へ言う。麗日も頬を指でかきながら

「そうだね。まだ何にも無いのが怖いかな？ 下からテープを剥がす音は聞こえてたもんね。あれで雁字搦めになってたら、多分終了の合図がされてるだろうし」

「そうだよな。そう思うよな！ 警戒しようぜ麗日。葉隠がもういる

かもしれねえし、緑谷がでかい一発狙ってるかもしれねえ」

開始からの時間経過でも推測で改めて気を引き締めて警戒心を上げる二人。

部屋の中のどんな異変も見落とさないと言うような目で探るように見渡す。しかし葉隠はよほどうまく進んでいるのか、テープは微動だにしておらず、二人にはなんら変わったところは見いだせなかった。

だが当の葉隠はわりと苦境に立たされていた。

隙間が狭い！ 葉隠は”核兵器”まで残り4メートルほどというラインまで接近できていた。

慎重に足音を立てずかつテープに接触しないようにゆっくりと焦らず進んだ結果だ。だがそれもここで通れる隙間が無くなり進退窮まってしまった。一旦退いて改めて別ルートを模索するのが正攻法なのだろうが、瀬呂が言ったようにタイムアップが迫っている感じがひしひしとする。瀬呂の妨害工作を功を奏しているのだ。

葉隠が狭い隙間を無理をして通り抜けようと博打に出るか、それとも一旦退いて道行きを改めるか、はたまた緑谷に応援を頼むか。

葉隠は今手元に通信機のないことを悔やんだ。自分の個性に不満を持ったことなどないが、不便に思うことはたまにある。今回もその事例のひとつになっただろう。

瀬呂テープの粘性は緑谷がグローブについたそれを剥がすときに苦心していたことから、例えば床の埃を手につけて少し隙間を広げようなんてことをしても、さほど粘着力が落ちることなく手に貼り付いたままになりそうだ。さらに言えば警戒の上がつた瀬呂たちはテープの揺れを見落とさず、こちら目掛けてテープを射出してくるだろう。

つまり無理矢理隙間を通ることそのものが無謀と言える。

だから葉隠は決めた。このままではジリ貧だしヘタをすれば負ける。それならば――

「緑谷！ お願いテープふっ飛ばして!!」

突然室内から上がった叫びに麗日と瀬呂はぎよつとして声の発生

点あたりへ顔を向ける。

その声は緑谷に自分の位置を知らせる葉隠の指示。あの超パワーの余波を出来る限り葉隠へ向けられないようにするために緑谷を動かす声だった。

緑谷はその声が聞こえるやいなや部屋へ突入する。その場で踏ん張り個性を発動させ、

「DETROIT SMASH!」

そう叫び気合一閃！ 葉隠の声がした位置とは逆側目掛けてテレフォンパンチ気味に右拳を空打ちする。

効果は劇的だった。

激音と激震がビル全体を揺らし全階層のガラス窓が振動でヒビ割れ、高層階には碎け散るものまであった。そして発生した衝撃波が最上階の壁面とその付近の床面を打撃し、激流に押し流される土くれのように碎け散らせながら吹き飛ばし崩壊させる。さらにはその余波で生じた突風が室内を乱打し、天井からこぼれ落ちた埃や塵が攪拌され、テープすらも剥がれそれぞれあらゆる方向へと乱れ飛んでいく。

「なんじゃあ、こりゃあああ!!」

「きやああああ!!?」

「にやあああああ!」

緑谷以外の3人から悲鳴が上がり、麗日と瀬呂は体勢を崩し床へ転び、それ以上動かされないよう四つん這いで体を支える。

やがて揺れがおさまると室内は乱れに乱れており、緑谷が立つ位置から先はほぼ建材が消滅してる勢いでぽっかりと抉られたように崩壊している。もはや風通しがどうのという領域をはるかに超えた様相を呈していた。爆薬でも使ったのかと思わされる状況だろう。

「~~~~~ッ!!!」

声にならない呻きを挙げて涙目で緑谷がその場に膝から崩れ落ちる。

衝撃ではじけ飛んだのかスーツの右袖が先から上腕半ばまで破れ落ちており、青黒く腫れ上がった素肌を見せていた。ソフトボール投げの時と同じく超パワーの反動だ。変色した肌と肩から脱力したよ

うにぶらりと垂れ下がってる様子からしておそらく最低でも前腕の骨が折れているに違いない。

「ひっでえなこりゃ」

瀬呂が起き上がりながらごちゃごちゃになっているが外の様子はよく見えるようになった室内を見渡す。”核兵器”は衝撃と振動で横に転がってしまっていた。

「タッチしたよー」

「は?」

そんな声が”核兵器”のもとから聞こえてきた。テープが何枚か張り付いている葉隠が平手で何度か叩いて主張している。

『WINNER! ヒーローチーム』

○

「と、まあヒーローチームが勝利条件を満たしはしたが問題点もあつただけだな! わかる人! なんてかな!」

重傷を負った緑谷をハンソーロボが保健室へと運搬するのを見届けたオールマイトはモニタールームへ戻るとこれまで通りに生徒たちへと水を向ける。

ずびっ! と音が聞こえそうになかつちりした動きで挙手する飯田。

ほかにも紙木城や八百万などどこれまで意見を述べていた生徒たちもそれにならっていた。

「ン〜、最後だからみんな張り切ってるのかな? では飯田少年に聞いてみようか!」

アメリカンな笑顔で場を見渡し一言述べると指名するオールマイト。

飯田は手を下ろすときちつと腿の横に両手を添え指先をびつと地面へ向けて直立不動の姿勢をとる。

「はい! 今回ベストだと思うのは瀬呂くんです。」

ビルの入り口や1階層の窓を封鎖し侵入口を妨害すること。またある程度登った階層から階段にテープで封鎖し始めたこと。そして”核兵器”のある部屋でテープを罫として張り巡らせたこと。すべてがヒーローチームの侵入と”核兵器”の奪取を妨げるために効果

的な行動であり、事実それは奏功していたと思います。

また緑谷くんが透明人間である葉隠くんの隠密性を保つために、ヴィランチームの設置した罠であるテープを一人で解除し、最上階まで無傷で保てたことも効果的な行動だったでしょう。ただし彼はそれ以上に、“核兵器”のある場所で個性を絞ることなく使用し、建物全体に甚大な損害を出したことが失点だと考えます。本来丁重に取り扱うべき”核兵器”が転倒するという結果も出ていたので、それが問題点だとオールマイト先生はおっしゃっているのではないかと！

これらのことからヴィランチームは敗北したとはいえ、瀬呂くんがベストだったと考えました。以上です！

「サンクス飯田少年！ まあ言いたいことは概ねそんな感じだ！ 瀬呂少年のあれも出るときのことを考えたらやりすぎなところもあつたりするんだけどね！ それを補って余りある周到さが光っていたな！」

オールマイトが飯田の講評を補強し、モニターの電源を消す。そのまま退室するように良い、グラウンドに整列させた。

「よし！ みんなおつかれさん！ 目立つような大きな怪我は緑谷少年と口田少年以外なかったし、皆持てる全力を尽くして真摯に取り組んでたぜ！ 初めての実践訓練ってことを差し引いても上出来だったさ！」

オールマイトが生徒たちを見渡し賞賛する。胸を張り腕を腰にやり堂々とした立ち姿でそう言われるとどこか誇らしい気持ちが湧いてくる。平和の象徴ならではの畏怖を生徒たちは感じ取っていた。

「でも相澤先生のあの嘘除籍付き個性把握テストがあつたからどうなるかと思っただけど、結構まっとうなヒーローの授業って感じだったね」

「心が身構えてた分拍子抜けした」

「H A H A！ 授業内容をどうするかもまた教師たちの自由ってことさ！ 口田少年はきちんと保健室へ行くように！ 間違っても自分で判断なんかしちやだめだぜ！ 次の授業に遅れず着替えて教室へ戻るようにな！ 私は保健室で緑谷少年と蛙吹少女に講評を聞かせ

るお仕事が残っているから失礼する！」

言い残して突風に乗るように駆け出すオールマイト。土煙を上げながらあつという間に走りぬけ豆粒のように小さくなっていく。残された生徒たちはそれを見て思い思いにオールマイトの凄みを口にしていた。

○

蛙吹が目を覚ますとそこは保健室のベッドだった。

柔らかな天井灯が優しく室内を照らしており、傷病者を刺激しないように気を使われている。

ゆっくりと起き上がると、横には右腕をギプスで固定した緑谷が、規則正しい呼吸で眠っているのが見えた。

「目、目が覚めたか。あ蛙吹。りかりカバリーガール！ あ、蛙吹がめを目をさ、覚ましました」

「赤熊ちゃん。どうしたの？」

制服の赤熊が、ベッド脇にパイプ椅子を引っ張ってきて座っていたのだ。あまり表情が受け取りにくい顔だが、どことなく心配してるように感じたのは蛙吹の気のせいだろうか？

「い、いや。お俺のせいだし、失神させてしまったからな。やす休み時間うちに、み見舞っておこうとおも、思っただけだ」

机で書きものをしていたりカバリーガールがそれを中断してやつてくる。

「頭は痛くないかい？ 体でどこが痛むかね？」

「蹴られた胸元が少し痛むくらいで頭は大丈夫です。他に痛むところはありますか」

リカバリーガールが蛙吹の大きな目を覗き込みペンライトでちらちらと瞳孔反応を確認する。

「そうかい。それじゃあ教室に戻っていいよ。もし痛みが酷くなったら我慢せず病院へ行くこと。いいね？」

「はい。ありがとうございます」

ベッドから降りようとする蛙吹にリカバリーガールは紙を一枚差し出す。

「オールマイイトからだよ。あんたに授業の講評だつてさ。心配そうに様子を見に来ただけけど、そっちの子と二人揃って眠ってたからね。預かつといたんだ」

すっかりした足取りで立ち上がりそれを受け取る蛙吹。

「ありがとうございます」

「うん。ふらついたりしてないようだね。きちんと学んで良いヒーローにおなり」

蛙吹と赤熊の二人は挨拶して退出すると肩を並べて歩き出す。

蛙吹はまず更衣室で着替えをする必要があるが、赤熊もその途中の階段までは方向が同じだ。

「あ、歩き読みはあまりぎ、行儀が良いとは言えないな」

「わかつてるわ。でも講評も気になるのよ」

そのまましばらく無言で廊下を進む二人。

「ああ、緑谷ちゃんは個性を使つてあんなったのね。ソフトボール投げのときも思つたけど不思議な個性だわ」

「そ、そうだな。こ個性の成長と、か、噛み合っていない印象がす、する」

「私の試合は口田ちゃんがベストなのね。てっきり赤熊ちゃんがそうかと思つていたわ」

顔を赤熊へ向けながら蛙吹が言う。

「こ、講評にもあるように、あ、あれはこ口田のじ情報収集ありきだ。そ、それに爆豪が独断専行、したのも大きい」

「爆豪ちゃんの独断専行はどうするのが正解だったかわからないわ。あれ以上引き止めても聞かなかつたと思うし。かと言つて一緒に行つても、今度は核兵器がおろそかになつてしまう」

顎を指先で撫でながら蛙吹は首を傾げる。

「俺はあれがあ、蛙吹がああ場でできるベストだったとお、思うがな。お、俺のき、奇襲もやり過ぎとして、ば爆豪の助けもよ、呼べていた。二人の性格とこせ個性から考えると、アレ以上できることはた、多分無かつたらう」

赤熊が慰めてるつもりなのか、それともただ単に事実を述べている

だけなのか、表情や声色からはわからない。

蛙吹は講評の用紙を綺麗に折りたたむとポケットへと仕舞いこむ。そしてため息をひとつ。

「ヒーローへの道は険しいわね」

「そうだな。だ、だが、だからこそ、の、乗り越え甲斐があ、ある」
やがて階段にさしかかり、赤熊は軽く挨拶し教室へと向かった。

更衣室で着替えを済ませた蛙吹が教室の自席につくころには、休み時間もちょうど終わる頃合いだった。

次の授業は「ヒーロー情報学」、座学だ。

プロ免許を取得するための知識を叩き込むための授業で、ヒーロー活動においてプロが知っておけなければならない、知っていて当然の法律や各種過去の事例から個性別で適応される例外的措置などを学ぶ。

例外的措置に関しては、数年前にデビューした女性プロヒーローのマウント・レディがわかりやすい例だろう。

彼女の個性は巨大化することであり、自らの体の大きさを基本身長162cmから2062cmにできるといふものだ。だがしかし、細かな調整が不可能なことから、二車線以上の道路にしか進入してはならず、また同条件以外での個性の使用が禁じられている。

A組生徒たちの中にも将来プロ免許取得時に進入禁止地域を申し渡されるものもいるだろう。

午前のいたって普通な授業でもことさらに騒がしくしていたわけではないが、ヒーローを志す生徒たちだからかこの授業はより一層集中しているように見えた。

そして最後の授業とホームルームも終わり放課後――
「なあ皆ちよつと聞いてくれ！」

相澤が教室を退出し扉を閉めると切島が立ち上がり皆へ呼びかける。

「せっかくだし訓練の反省会しねえ？」

その提案にほとんどの生徒が賛成し、提案者の切島の席にこぞって集まってくる。

ほとんどと言ったのは乗り気じゃない生徒もいるからだ。

爆豪などはその言葉を無視する勢いでカバンを肩にかけると無言で帰宅しようとする。

当然切島はそれを見逃さない。切島以外の賛成者も皆一様に爆豪を引き止めるが、彼はそれを一瞥するだけで何も言わず教室から出て行ってしまふ。何やら据えた目つきでどこことなく乾いた印象を受ける顔つきだった。

……反省会、反省会ねえ。春臣は戦闘訓練を思い返し、自身にそのような点があつたか考える。

数秒。

無いわ。うん、飯田に任せつきりだったし、とくに反省して改善点を模索するようなところ全然無かつたわ。

「私は反省も何もほとんど手出しせず終了してしまったので、反省会と言われましても……」

智満のそんな少し申し訳無きような発言が聞こえたのかどうかはわからないが、轟の体が多少揺れる。ヤタがつばを吐き捨てるジェスチャー。

「ハルくんはどうします?」

「ボクは帰ろっかな。飯田を囚……もとい飯田に任せつきりで最後の一手で良いところ持ってたただけだからなあ」

「いいや! あの作戦が本当に正しかったのか? もっとよりより行動はなかったのか? そういうことを考え、また第三者から指摘・提案されるのも皆でやる反省会の意義ではないだろうか!」

飯田が角ばつた動きで春臣に振り返り言う。

「おお……熱いな」

すでに皆で和気藹々と話し合っていた切島が思わずそう漏らす。

「だから二人とも第三者視点で反省会に参加してほしい」

まっすぐに視線を向けて言葉を放つ飯田。その生真面目な眼差しを受ける2人は

「申し出はたいへんありがたいのですが、あいにく今日は家の手伝いをしないといけなくて……。ですので今回は帰らせていただきま

すね」

「ボクは智満ほど蚊帳の外状態じゃなかったし、飯田がそこまで言うなら付き合うよ」

「優柔不断」

智満がぼそりと告げた一言が春臣に刺さる。露骨に舌打ちして不満をあらわにするヤタ。

春臣は目を合わせないように顔を背け

「うっせ。さっさと帰れお前。そんで境内でも掃き掃除してろ」

と言い捨てる。同時に冷や汗を浮かせながら席を立ち、クラスメイ卜たちの会話の輪の中へと逃げ出した。智満からの穿つような目が春臣の背中を粟立たせる。

「いいの？ 智満ちゃんあれ怒ってない？」

浮いた制服が動いてるようにしか見えない葉隠の発言だ。顔色が見えないから好奇心なのか老婆心なのか発言意図がまったく読めない。純粹に心配であろうかと春臣は思った。

「いまさらだからいいの」

「幼馴染だっけ？ 付き合い長いだけの信頼があるね」

「それより今は誰の反省会？」

自分の話題を打ち切らせるように、やや声量を上げた春臣に芦戸が顔をにやつかせる。

「今は砂藤だよん。自分たちはどうすればよかったか？ って議題ね」

「ああ……。ひどかったね紙木城の完封劇」

春臣のしみじみとした言い方に、改めて砂藤と上鳴という当事者を始め皆がうなづく。

「あれは彼女がヴィランチームだった時点でどうしようもなかった気がする。これ轟もそうだね」

「さすがに囲まれたときは紙を俺の電撃で燃やせると思ったんだけどな。落雷で山火事とかよく聞くしよ。捕まるよりは小火が出ても核兵器 確保がいいかなって思うしさあ」

その上鳴の発言にそれまで黙っていた紙木城が口を開き

「二応入学する前から訓練してましたから。でも、上鳴くんの電撃が、私の紙々と相性が良くなかったことは間違いないですよ。あとは爆豪くんも相性は最悪でしょうね。ただ電撃に私の紙を燃やせるほど熱量が無かっただけです。お互いに改善点の見つかる実りある訓練でしたね」

にこりと微笑みながら言う。顔は笑っているがしかし目には喜びも楽しみも浮かんではいなかった。

訓練のときは外していた角縁の眼鏡の奥にある目に潜む、その笑っていない理由がなにに起因するものまでかは付き合いの浅い春臣たちにはわかるはずもない。

「砂藤さんは単純な増強系でしたから、ああいう状況で封じられると手のうちようがないのが困りものですわね」

「ああ。単純だから力負けすると本当にどうしようもないって思い知らされたよ。紙もあれだけ巻き付くと脅威だな」

八百万の言葉に砂藤が頭をかきながら応える。

「焼き払うのが一番の対処だと思うが、それはヒーローの所業にあらず。かといって”核兵器”を防御する役割があるから立場が逆だったとしても下の下だな。光鎧路の言うとおり、轟と紙木城はヒーローとヴィランの、そのどちらの役回りでも完封してきそうだ。志を同じくする朋輩であるが、実践訓練においては勝利したい好敵手と言ったところか」

しよぎよう……。ほうばい……。

机に腰を掛け椅子に足を置きながら、なにやら格好をつけて独特の口調で発言する常闇。その言語センスからひねり出された熟語を口々につぶやく女子。しかし常闇の耳には入らなかったのかそのつぶやきを気にも留めない。

そのような感じで残った生徒たちは、授業とは違う軽い空気の中でそれぞれの試合での反省点、改善点、感想、意見を思い思いに語り合っていたのだった。